
あの人を探して

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの人を探して

【Nコード】

N5635M

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

ごく普通の高校生、日割ひわり 沙英さえはある日突然攫さらわれる。

その三日後なんとか生還を遂げるが、事件の傷跡は思ったよりも重く、深かった。

彼女の親友である大臣おおとみ 友ゆうは沙英を助けたい一心で、沙英の話で聞いた恩人を探すよう提案する。

沙英は自らを助けてくれた恩人に会うために。

友は自らの友達とまた無邪気に笑いあうために。

二人は、奮闘する。

プロローグ

??? どうして? ? どうしてこんなことになったの? ?

?? 後ろ手に縛られ、猿轡をかまされた十五歳の少女は、この三日間幾度となく繰り返した疑問を浮かべた。それは答えのない疑問だったが、彼女はそれを考えずにはいられなかった。

なにがいけなかったの? ? 友達と放課後まで遊んでいたせい? ? それとも、テストの点数が悪かったから? ? それとも、私がこんな性格だから?

?? とりとめもないことから、自身の性格まで、ありとあらゆる原因を探ってみたが、彼女の中に攫われても仕方ない、と思えるような原因は見つからなかった。こんなことになった直接の原因となる記憶を、彼女はまた思い出す。

いつものように友達と楽しい学校を終え、放課後。陸上部のクラブが終わり、体操服のまま家に帰っている最中、帽子を目深にかぶった男にいきなり襲われ、気がついたらここだった。思い出すのは友達とかわした会話、クラブで走った時の高揚感、そして、攫われるときの際限のない恐怖と、緊張。

「.....はあ」

小さく息を吐き、枷を嵌められた足を引きずるようにして視界に入れる。枷には鎖が繋がれ、その先は壁に埋まっていた。少女の力では、どう頑張っても外せそうにない。長さは扉に手が届くぎりぎりになっており、犯人のいやらしさが見て取れた。希望を見つげようと、部屋を見回す。扉には鍵の類は一切なく、三日前に結論付けたと同じく、自分が囚われている以外はごく普通の部屋だということを確認した。

?? ? 「.....」

?? この三日、少女を攫った犯人は食事、排泄の時以外は一切関わってこようとはしなかった。だからといって恐怖が薄れるかと言え

ばそんなことはなく、どころかじわじわと、得体のしれない恐怖が全身を少しづつ蝕んでいく。自分は何をやらされるのだろうか。もしかしたら、売られるのだろうか。それとも自分が壊れるまでこのまま放っておかれるのだろうか。このまま七年間閉じ込められ続けて社会的に死んだことになった瞬間、好き勝手されたあげくに殺されるのだろうか。そんな暗い想像が何度も頭の中に浮かんでは消えていく。

??「いつそのこと殺すなりなんなりしてくれれば、こんなこと考えるのもなくなるのに……。」

??「この数時間、少女はそんなことばかりを考えていた。こんな思いをするくらいなら、死んだ方がいい。殺されたいわけではない。けれど、怖い思いをし続けるのは、殺されるよりも嫌だった。」

??「やあ、日割ちゃん」

??「！」

??「低いダミ声が聞こえて、初老の男性が部屋に入ってくる。その瞬間は覚えていないが、少女……日割？沙英を攫った犯人に違いなかった。男は沙英の猿轡を外すと、優しくに微笑んだ。」

??「大丈夫？　痛いところはない？」

??「え、あ、あの」

??「ごめんね、三日もほったらかしにして」

??「沙英は、本当にこの人が自分を攫った犯人だろうか、と思い始めていた。長い間極限状態にさらされ、限界などとうに超えている沙英は、その笑顔に潜められた底無しの悪意に全く気づかなかつた。だから、優しく気遣うような声に騙され、救いを求めるように訊いてしまった。」

??「あ、あの、どうして私、ここに、いるんですか？」

??「覚えてないの？」

??「沙英は頷いた。」

??「そうなんだ。じゃあ、教えてあげるよ。三日もほったらかししてた理由も一緒にね」

?? 男は懐から携帯電話を取り出すと、何度かボタンを押して、それから画面を沙英に向けた。

?? 「……っ！」

?? 「ふふふ、いい顔だね」。あ、そう言えば名乗ってなかったね。

? 僕はかがい。嘉蓋 ? 栄。^{さかえ}ふふふ、ずっと調べてたからね、手間取っちゃって」

?? その画面に映っているのは、赤とピンク、そして肌色。顔にはいろんな感情が煮詰まりすぎて何の色も示さなくなった表情が貼り付けられたように浮かんでいた。ここは犯人の目の前、少しでも犯人に不快な感情を与えたら、たちまち自分は殺されてしまう。そう思った沙英は、こみあげてきた吐き気を必死でこらえる。

?? 「大丈夫だよ、これからはちゃんと、遊んであげるからね」

?? 画面に映っているのは、惨殺死体だった。男がこうして自分にこんなものを見せるのは、自分をこつするという予告なのだろうか。沙英はそんな想像を逃避のように考える。

?? 「頑張って調べたんだよ? どんなことをすれば痛いとか、気絶することなく、苦痛にさいなまれるような痛めつけ方、とかね。まずは指からだね。まず爪の先を爪切りで少しづつ切っていいこう。血が出て、肉を切ってもやめないからね。骨が見えるあたりまでパチパチやるのかな」

?? 「そ、そんな」

?? 「全部切り終わったら、こんどは足だね。足は手と違ってなくても大丈夫だから、全部すり潰しちゃおう。わざわざこのためにミキサー買ったんだ。業務用のすごく大つきなやつ。ジュースみたいになってると思うから、飲む? 自分の肉」

?? 「い、いや、やめて」

?? 「足が終わったら、今度は……」

?? そこから先は、もはや沙英の耳に入っていなかった。ただ、彼女の心にあるのは、そんなことされるぐらいだったら早く死にたい、という思いだった。

??「あ、あの、いつ、ですか？」

もうこれ以上聞くに堪えなくなった沙英は、話題を変えようとして訊いてしまう。

??「ん〜？」

??「いつ、私はそれをされるのですか？」

??「そうだね、君も乗り気みたいだし、今からしよっか」

??びくりと、沙英は肩を跳ねさせた。男は立ち上がり、部屋を出ようとする。

??「道具を取ってくるよ。楽しみにしててね」

??嬉しそうにそう言うと、男は部屋を出ていった。止める暇もなかったし、止めても待つてくれたかどうか、わからない。

??「……や、嫌」

??怯えた瞳を床に向けたまま、沙英は呟いた。だんだん、心が冷え込んでくるような感覚を沙英は味わう。彼女の心は何も感じなくなっていく。恐怖も、怒りも悲しみも、何も感じない。あまりにもそれらの感情が強すぎて、感じることを心が拒否したのだ。

??「……おとーさん、おかーさん……」

??二年前に死んだ両親との思い出を走馬灯のように思い出す。思い出す度にあつたはずの感動や郷愁の気持ちも今はなく、それらがなくなつたことにさえ、何も思わない。

??「……さよなら」

??沙英は口を開け、舌を大きく突き出す。

このまま舌を噛み切れれば、死ねるだろう。そんな話をどこかで聞いたことがある。苦しいかもしれない。だけど、あの男に与えられる苦しみや痛みに比べたら、ずっと楽なはずだ。

死にたくない。わかってる。生きていたい。わかってる。助かりたい。わかってる。

でも、今はそんなことよりも、あの男が戻って来るまでに死なないと、私は……。

??そんな焦りが、沙英の心を支配する。早く死ななきゃ、早く死

ななきや。心は何も感じていないはずなのに、彼女は死ぬ事ができなかった。

??「……………ああ……………」

??扉が開いて、沙英はタイムリミットが来たのだと悟った。自分は決断しきれなかったのだ。その代償は、今まで経験したことも想像したこともない、苦痛。嫌だ。そう思っても、もう遅い。あと私に残された救いは、狂うか死ぬかの二つに一つ。

??「大丈夫？」

??そう諦めた沙英だったが、部屋に入って来たのは人の良さそうな、沙英と同じぐらいの年齢に見える少年だった。彼は沙英のそばまで寄ると、話もせずに、手足の枷を外して、沙英を自由にした。

??「早く逃げて。急がないと殺されてしまうよ」

??「え、で、でも」

??もしかしたら、これは罠ではないだろうか。ここで逃げるそぶりを見せたら、もっともつと残酷な目に遭わされるのでは。そんな疑惑が頭をよぎり、一瞬で沙英の全てを支配した。

??「い、嫌！　？私はここにいるの！　？だから、早く出ていって！」

??もう命は諦めた。だから、できるだけ痛くないように、苦しくないよう頑張らないと。もう沙英の中に助かるという選択肢は、消えてしまっていた。

??「外に出てみて。警察がいるから、急いで外に出れば、助けてくれる」

??「う、嘘！　？だったら、なんでサイレンの音がしないのよ！」

??「……………犯人が、切らせたんだ。だから、早く逃げて」

??「い、嫌」

??もう生きる望みを完全になくした沙英の心は、少年の瞳に嘘を言っているような色がないということも、気付けない。

??「……………ああ、もう」

??「きゃっ、嫌っ！　？離してッー！」

?? 急に手を引つ張られ、パニック状態になった沙英を無視して、少年は沙英を部屋の外に連れ出す。部屋の外はごく普通の家屋で、玄関まではずぐに辿り着けた。

?? 「早く、出るんだ」

?? 「で、でも」

?? 「ああ、もうっ！ 悠長にしてられないって言ってるよね！」

?? 彼は乱雑に玄関の戸を開け放つと、沙英を外に突き飛ばした。

三日間身動きをしていなかった彼女は、受け身も取れずにこけてしまっ。

?? 「君！ 大丈夫か!？」

?? 青い服を来た誰かが、倒れた沙英を優しく起こした。何が起こったのかわからず、抱き起こされると沙英は飛び跳ねるようにしてその誰かから距離をとった。

?? 「あ、あなたは、誰？」

?? 「私は警察の人間だ」

?? その誰かは懐から警察手帳を沙英に見せると、腰の無線機に手を伸ばした。それでも、まだ沙英の頭は目の前にいる人間が自分をさらった犯人の仲間かそうでないのかを一生懸命判断しようとしていた。

?? 「こちら桜田！ 被害者の少女を保護！ 今奴の家には誰もいない、確保急げ！」

?? 沙英はそこまで聞いて初めて、自分は助かるんじゃないのか、と思い始めた。周りを見渡すと、白黒の車が何台も沙英のいた家を取り囲み、たくさんさんの青服の人間が、沙英を心配そうに見ている。

?? 「……大丈夫、君は助かったんだ。辛かったね」

?? 目の前の青服の誰かに優しく抱きとめられ、沙英はその誰かが女性であることを初めて知る。

?? 「……え、あ、え？」

?? 目の前にいる青服の人間……沙英はここで彼らを警察の人だと認識できた。沙英は自分を抱きしめる女性警官と、自分を助けて

くれた少年に向けて、小さくお礼を言った。

「……………あ、ありが、と……………」

??「き、君!??」

??助かった、と安心したとたん、沙英は例えようもなく強力な睡魔に襲われ、彼女はそれに抵抗しなかった。安心して意識を失う、ということが今はとても貴重で尊いもののように沙英には感じれた。意識が遠のき、救急車を呼ぶ声が聞こえる。

……………あの人、誰だろう……………?

沙英は、攫われた家で、人のよさそうな笑みを向けてくれた少年の顔を思い浮かべながら意識を失った。

第一話

???「きゃっ！」

??沙英は飛び起きた。自分の手と足を確認して、あの時のように縛られていないかを何度も何度も確認する。それが終わると今度は口に手を当て、猿轡を咥えさせらへていないか確認する。それが終わって、初めて彼女は息をついた。

??「……よかった、夢か」

??幾度となく繰り返し見た、あの三日間の夢。眠っているのはほんの二、三時間も無いというのに、凝縮された記憶が悪夢を見せる。??「……」

??ベッドから起き上がると、沙英はリビングに向かう。沙英の家は二階建てだが、両親が死んでからは、一階しか使っていない。おもむろに、テーブルの上にあたりリモコンをとってテレビをつける。

??『……現在逃走中の容疑者、嘉蓋。?栄は被害者の少女を誘拐、殺害しようとした罪に問われています。このところ続けている少女の誘拐殺人も同様の手口であることからみて、警察は連続殺人も視野に入れて捜査しているとのこと。……コメンテーターの火野さん、どうぞ』

??胡散臭そうな評論家もどきがテレビ画面に映ったところで、沙英はテレビを消した。

??「……まだやってる。」

??彼女は微かな悲しみを胸に灯しながら思った。もう事件が終わって三日も経つというのに、テレビではまだ沙英の事件を面白おかしく報道していた。自分で誘拐犯から逃げたのが彼らの琴線に触れたらしく、局によっては沙英の狂言誘拐ではないか、とさえ言うほどだ。

??「……もういや」

?? 学校にはまだ行っていない。学校に行けば帰らなければならぬ。帰ろうとしたら、また攫われるかもしれない。前は助かった。けど、次はもう助からないかもしれない。そんな怯えが、沙英を不登校にしていた。

?? 「……おとーさん、おかーさん」

?? 事件に遭うまではよほどのことがあっても思い出さなかった両親のことを、沙英は思い出す。今、ここに二人がいれば、なんて言ってくれるだろう。よく頑張ったね、辛かったよね。そう言ってくれるだろうか。

?? 「……っ！」

?? 不意に吐き気が込み上げてきた。優しい言葉をかけてきたあの犯人のことを、そしてそのあとに見せられた携帯の画面を恐ろしいほど鮮明に思い出したのだ。

?? 「う、うっ……」

?? 優しい言葉、心配する言葉。そんな単純なことから、彼女は事件のことを思い出す。こんな状態では、帰宅が怖くなくても学校など行けるはずがない。沙英はうずくまり、静かに涙を流す。テレビ局の人間は、未だに玄関の外に待ち受けている。まもしかしたら盗聴もされているかもしれない。声をあげるわけにはいかない。沙英はこの三日間で、そんな疑心暗鬼に囚われつつあった。

?? 「おーい！ ? 沙英！ ? まだ生きてる？ ? 死んでない？」

?? だから、からかうような声が玄関の向こうから聞こえた時、沙英の心は幾ばくか救われた。

?? 「……ゆ、友……？」

?? ふうらふらと、蝶が光に吸い寄せられるように玄関まで歩き、警戒もせずに扉を開けた。

?? 「おや？ ? 門かけてから開けて、訪問の意思を確かめないと。

警戒は怠っちゃだめだよ」

?? ショートカットで茶髪の、快活な少女、大臣 おおとみ 友 ゆう が沙英の前に立っていた。

??「で、でも、友が来てくれたから、嬉しくて……」
??その返答に、友と呼ばれた少女は目を丸くした。
??「ほ、ホントにあなた沙英？」
??「うん。私は、沙英だよ。日割 沙英」
??「……まあ、とにかく家の中入れてもらっていい？ ……ネズミがちよろちよろして鬱陶しいから」
??友は後ろを睨みつけるようにして言った。
??「う、うん、いい、よ」
??沙英はそんな友を不思議に思いながらも招き入れた。リビングまで招くと、友に椅子を進める。彼女は座り、ゆつたりとくつろぐ。
??「うわ、沙英の家初めて来たけど、結構広いね」
「うん、私には広すぎるくらい。何か、飲み物いる？」
??「ビールとかある？」
??「だめだよ、そんなもの飲んだら」
??「え〜。いいじゃん」
??「だめ。というかビールなんてこの家にないよ」
??「そうなの？」
??「うん、飲める人がいないから」
??「お父さんたちは飲まないの？」
??「……いないの」
??友が気まずそうに黙った。
??「ごめん」
??「いいのよ、話してなかった私が悪いんだし」
??「そ、そんなことないよ！」
??でも、となおも言おうとする沙英に、友は被せて言う。
??「別に、友達同士だからって何もかも話さなきゃいけないってことじゃないでしょ？ ？無神経な私が悪かったんだって」
??「でも」
??「……ん？ 沙英はお父さんたちいないんでしょう？ ？じゃあ、沙英、今までどうしてたの？」

?? 話題を変えようとして、友は一つ気付いた。

?? 「今までって?」

?? 「その、事件が終わってから、誰に頼ってたの?」

?? 「どうして誰かに頼らなきゃいけないの?」

?? その言葉は、友を突き放すように発せられた。言っている沙英だつて、心の奥底では、両親に甘え、すがりたい。でも、それはできないのだ。もう、二人はいないのだから。

?? 「……誰にも頼りたくないの?」

?? 「うん」

?? 実は、一人だけ頼りたい人間がいるのだが、沙英がそれを友に言うことはなかった。

?? 「私にも?」

?? 「……私に頼られたら、潰れちゃうよ」

?? 「大丈夫。もし私でダメだと思ったら、私のお父さんたちにも頼ってみよう?」

?? 「そんなの、悪いよ」

?? 「いいのよ。ずっと前から話してたんだし」

?? 友は、沙英がさらわれてからというもの、何かがあった時に沙英を助けられるように、彼女の両親を説得していたのだった。

?? 「……本当にいいの?」

?? 「いいよ。さ、存分に私に甘えなさい」

?? それなら、と沙英はおずおずと友に近づき、抱きついた。

?? 「……怖かった」

?? 「うんうん」

?? 「……ねえ、聞いて、友」

?? 「聞いているよ」

?? 優しげに、友は沙英を抱きしめ返す。沙英の中に誘拐犯の嫌らしい笑みが浮かんだが、必死にそれを振り払おうとする。

?? 「殺されるかも、って思った。もしかしたら、その、エッチなこともされるかも、って思った」

?? 「うんうん」

?? 「でも、何もされなかったの。それが、たまらなく怖かった」
?? 「そうなんだ」

?? 優しく、友は沙英の背中を撫でる。

?? 「でもね、三日目、犯人が来て、私に言ったの。『君を虐めるために調べるのに手間取ったんだ』って。画像も、見せ、られて…」

?? 目に焼き付いた赤色が、沙英の頭の中を埋め尽くす。あの時はあれが自分の未来の姿だと信じて疑わなかった。目を固く閉じ、必死であればもう終わったことだ、と自分に言い聞かせる。

?? 「大丈夫。もうあなたは助かったんだから、ね？」

?? 「う、うん。でも、でも、私、今でも思うの。どうして、あの時死ねなかったんだろう、って」

?? 「……？」

?? 「私、死のうと思ったの。痛いのは嫌だから、舌を噛んだら死ねるっていうのを思い出して、それを、試してみよう、って」

?? 沙英の背中を撫でる手が止まった。

?? 「それで、どうなったの？」

?? 「死ねなくて、扉が開いて、もうダメだ、って思ったら」

?? 「思ったら？」

?? 「助かったの」

?? 「……え？」

?? あまりにも突飛な展開に、友はついていけなかった。まさか記憶がないのか、と見当をつける。

?? 「男の子が私の部屋にやってきて、助けてくれたの」

?? 一度は話さないと決めた沙英だったが、ついポロリと口に出してしまった。けれど、意外と沙英の中に後悔はない。

「誰なの、それ」

?? 「わかんない」

?? あ的那个人は誰なんだろう。沙英の疑問はさらに強くなる。

?? 「攫われて、三日間もほっとかれて、それで殺されることが決まって、そうしたら男の人が助けてくれた？」

?? 「うん」

?? 「めちやくちやだ、と友は思った。けれど、嘘をついているようにも見えないし、沙英の言う人物が幻覚ということもないだろう。でなければ、今頃友は沙英の葬式に出ているはずである。

?? 「うーん、じゃあ、それって誰なんだろう？」

?? 「私も気になる。私の、命の恩人だから」

?? 「人の良さそうなあの笑み。彼のおかげで、沙英は今生きている。その恩は、一生をかけてでも返していきたいと思う。」

?? 「じゃあ、探してみる？」

?? 「え？」

?? 「友は、これだと思った。今、沙英は必死に明るく振舞っているつもりだろうが、それでも事件に遭うまでとは比べ物にならない。命の恩人を探すことで、あのころの沙英が戻ってくるのではないか。そんな希望を、友は見出した。

?? 「そんなに恩返ししたいなら、探そうよ。その、命の恩人さんを、さ」

?? 「……それ、いいかも」

?? 「沙英は友を離れた。沙英は笑って、友に言う。

?? 「ありがとう。あの人を探してみる」

?? 「私も手伝うわ」

?? 「そんな、悪いよ」

?? 「いいのいいの。友達を助けてくれたんだから、私からもお礼ぐらい、言わないとね」

?? 「快活に微笑んで、友は言った。

?? 「ねえ、沙英。学校、来れる？」

?? 「そ、それは……」

?? 「普通の友達に言うように友は言って、彼女はしまった、と言う顔をした。沙英は学校の帰りに攫われたのだ。学校に行きたいわけ

がない。？

?? 「……ごめん」?

?? 「ううん、気にしないで。私、頑張ってる」

?? 「強いね、沙英は」

?? 掛け値なしに、友はそう思った。もし、自分が学校帰りに攫われて、三日も囚われ続け、生還できたかどうか。きっと、もう二度と学校には行かないだろう。また攫われるんじゃないかと不安になって、怖くなって、部屋さえも出なくなるだろう。友にはそんな想像が簡単にできた。沙英とて、怖くないわけではない。けれど、このままではダメだと、直感したのだ。このまま引きこもっていても、自分はダメになる。怖いのを少しでも我慢すれば、きっとそんな希望さえ、今まで沙英にはなかった。希望が湧いたのは、ひとえにこうして様子を見てくれた、友のおかげ。

?? 「じゃ、あんまり長居して悪いから」

?? 「うん。帰り道、気を付けてね。絶対に、暗くなるまでに帰ってね。もし何かあって、暗くなったら引き返してきてもいいからね。帰らなきゃ、きっと大丈夫だよ」

?? 「そうね。暗くなっても家につけなかったら、泊めてくれる?」

?? 「もちろん。この家、今は下宿屋さんができるぐらい部屋が余ってるの」

?? 「ありがとう」

?? 玄関まで沙英は見送りに出る。

?? 「じゃ、明日また学校で。辛かったら無理して来なくていいからね」

?? 「うん、ありがとう、友」

?? 「じゃあね」

?? 「バイバイ」

?? 笑顔で手を振り、友は家を出た。扉が閉まると、家には沙英一人になる。

?? 「……はあ。泊まってるって、って言えばよかったな」

??外を見ると、まだ夕日が空を赤く染めていた。赤。……血の、赤。携帯画面の、惨殺死体。

??「……………だめ、ダメダメ。思い出しちゃ、だめ」

??かぶりを振って、頭の中の映像を追い出す。

??「夕日もダメ、かあ……………。私、こんなので生活できるのかな」

??独り言を言いながら、沙英はリビングの隣にある寝室に入り、ベッドに寝転がる。今の沙英にとって、眠ることさえ彼女の害になる。けれど、横になって体を休めることは、嫌いではない。眠らなければいいだけだ。

??「おとーさん、おかーさん、友……………」

??両親を呼ぶ声と同じ調子で、友達の名前を呼ぶ。

??「……………ありがとう」

??今日、友が来てくれたおかげで、沙英はかなり救われたような気がしていた。助かってから人と話したのは、警察の人と学校の人だけで、同世代の人とは全く話をしていなかった。だから、友と話をできて沙英はとても楽しかったし、学校に行こうという気にもなった。恩人を探そうという気にもしてくれた。友には礼を言っても言い足りない。そんなふうに彼女は思う。

??「……………また明日、かあ」

??そんな風にまた挨拶ができるようになるなんて、三日前の沙英はまるで考えていなかった。あの場所が自分の墓場。そう思っていたのに。あの人に助けられたおかげで、自分はこうして日常に戻ってこれた。再び、沙英の中に恩人に対する果てしない感謝の気持ちが湧き上がる。

??「……………」

??いつしか、沙英はだんだん思考がぼやけていくのを感じた。眠い。眠ってはダメだ。夢に見てしまう。眠い。ダメ。眠い。ダメ。

……………
??沙英は、恐怖を感じながら眠りに就いた。

第二話

?? 仄かな光が灯る狭い部屋。

?? 「……………助けて……………」

?? 少女の呟きは、誰にも届かず、ただ露のように消えていった。

?? と、思われたのだが。扉一枚隔てた向こうで、その呟きを聞いていたものがいた。決意に満ちた目をして、苦々しい表情を扉の向こうの少女に向けながら、彼は決意する。

?? ……助けよう。絶対に。

?? そして三日後、その決意は行動に移される。

??

?? 「……………」

?? 沙英は目を覚ました。事件が終わってから初めて、よい夢見だったと思えた。

?? 「……………誰なんだろう」

?? 夢にも出てきた、自分を助けてくれた恩人。沙英は強く、彼の事を思い描く。美化しすぎないよう気を付けながら、思い出す。日本人らしい黒髪、黒い瞳。優しげな顔には、沙英を気遣うような表情が浮かんでいた。あまりに普通の服装だったので、彼の服装を沙英はよく憶えていなかった。それを悔しく思うのは、自分が彼を恩人だと感じている証拠だ、と彼女は安心する。

?? 「……………今、何時だろう」

?? ベッドのそばにある時計を見て、沙英は驚く。まだ朝の六時に

もなっていないかったのだ。

?? 沙英はお弁当なんて作らず、昼食は学食で済ましてしまう。それに犬を飼っていたりもしない。朝にすることと言えば、シャワーを浴びる、朝食を採る、歯を磨く、着替える、以外のことは何もないのだ。つまり、六時なんか起きてしまつと、どうしても暇になるのだった。

?? 「……とりあえず、シャワー浴びよ」

?? 沙英はバスルームに半分夢うつつのまま向かった。

?? パジャマを脱ぎ捨て、洗濯かごに入れる。沙英はそこで、洗面台に写つた自分の裸身を見る。ごく普通の体型で、胸は可もなく不可もなくの大きさである。沙英は自身の体が傷一つなく、青アザになつていないところもないことを確認して、深く息を吐く。自分が気を失っている間にどうこうされた、ということはなさそうだ。そんな安心が沙英の心を少しだけ楽にした。

?? 「……」

?? シャワーを浴び終わり、体を拭き終わると、制服に着替えて朝食の準備を始める。彼女が通う高校は、制服、特に冬服が可愛いと中学でも評判で、つい最近まで普通の人間だった沙英も、その評判に釣られて入学を志した。今からすればその冬服が可愛かつたせいで攫われたのでは、とも一瞬思ったが、それを考えたら学校なんて行けるわけがない、と思いを振り払つた。パンにバターを塗つただけの簡素な朝食を意図的にゆっくりと終わらせると、洗面台に向かい、歯を磨き始める。

?? 「……よし、頑張ろう。大丈夫、大丈夫だから、きっと頑張れるよ」

?? 歯を磨き終わった沙英は、鏡の向こうの自分に言い聞かせた。

?? 寝室にある鞆を手に持ち、玄関へ向かう。時計を見ると、時刻は七時を指していた。今から行けば、半にはつくだろう。いつもより四十分も早い。

?? 「いつてきます、おとーさん、おかーさん」

??もつけない両親に向けて挨拶をし、沙英は家を出た。彼女の家に仏壇はない。沙英の両親が死んだ時、天涯孤独になってしまった彼女は二人の死があまり悲しく、葬式を挙げるだけで精一杯で、仏壇を買う余裕なんてなかったのだ。金銭面で不安があったのも、要因の一つだ。

外に出ると、朝の日差しが街を照らしているのが沙英にもよくわかった。

??「……………」

??朝の街をしばらく歩くと、沙英の口から呻き声が漏れた。

??何もかもが怖い。もしかしたら電柱の影に誰かがいるのかもしれない。もしかしたら、また攫われるのかもしれない。何が起こっても不思議じゃない。

??まだ、事件が終わって三日。沙英は本来外に出れるような精神状態ではないのだ。溢れ出る恐怖を噛み殺して、約束通りに沙英は学校に向かう。早く。沙英は、嫌いな人でも友達でも誰でもいいから、同級生に会えばこの恐怖から逃れられるような気がしていた。

??「お? ? ホントに来たの?」

??「……………! ? 友!」

??後ろから声をかけて来て、沙英は身構えたが、それが友達だとわかると、一転して顔をほころばせて、そばに駆け寄った。友の腕に縋りつくように抱きつく。

??「無理して来なくてよかったのに。まだ学校でも、沙英のこと誤解してる人、結構いるよ」

??「……………だ、大丈夫、だと、思う」

??「だから、無理しなくていいって。今からでも、家に戻る?」

??沙英は首を振った。快活で真面目だった沙英は、三日も学校を休むことに引け目を感じているのだ。攫われていた期間も含めると六日。それほどの期間を休むなど、事件の前の沙英ならばあり得ないことであった。

??「真面目なことだけは変わらないんだね」

??「……私、変わった?」

??「ものつすごく変わった」

??沙英は首をひねる。自分が変わったなどと言われても、自覚がほとんどないのだ。

??「自覚なし? まだ事件のこと忘れてないからだと思っけど……」

??もし、事件のことを綺麗さっぱり忘れられたとして、沙英は元に戻るのだろうか。友はそんな不安に見舞われた。

??「おはようございます、日割さん」

??沙英たちが学校まで着くと、校門のところに、男女の二人組が待っていた。

??「……こんにちは、刑部さん、桜田さん」

??沙英は二人に頭を下げて挨拶する。

??「なに、沙英。この二人知り合い?」

??「うん。こっちの人が、刑部

? 敬二さん。警察の人」

??沙英は男の方を手のひらで指して友に紹介する。男は軽く会釈。彼は白髪が少し目立ち、表情は厳しく引き締められている。着ているコートは機能的で、いろいろな小物が入っている。

??「こちらが、桜田 ? 桂香さん。刑部さんのパートナーだそうです」

??「よろしくね」

??沙英に紹介された女は、微笑みを浮かべてそう言った。そろそろ暖かくなってきたこの時期にしては随分重装備の刑部と比べ、桜田は長袖のシャツにジーパンというラフな格好だ。二人を紹介された友は、彼らが本当に警官かどうかを真っ先に疑った。

??「……なんでそんな格好なんですか? ちょっとそれで警官名乗るのは無理がありますよ」

??「なかなか優秀な警戒心ですね。関心です」

??「いいから、なんで?」

??友が妙につつかかるのには、理由があつた。もし、自分が油断したせいでまた沙英が事件に巻き込まれてしまったら、それは自分のせいではないだろうか。そんなことにもならないためにも、自分が守つてやるべきではないのか？　?そんな、義務にも似た感情が友の中にあつたからだ。

??「沙英さんへの配慮ですよ。マスクミ連中が喚いているこの時分、あなただつて先生方に嫌な心象を与えたくないでしょう？　?それとも、目立つ制服で来た方が、よかつたでしょうか？」

??「ぐ……」

??沙英のことを気遣つてのことだとわかつて呻く友。

??「ま、まあ、気にしないで。私たちも嬉しかつたのよ？」

??慌てて、隣の桜田が言い繕う。

??「沙英さんのお友達がこんなにもしっかりしてる子なら、安心できるからね。これからも、沙英さんのこと、助けてあげてね」

??「言われなくても、そのつもり」

??友は気恥ずかしさから顔をあさつての方向に向けながら言った。

??「あ、あの、なんのご用でしょうか？」

??人通りがだんだんと多くなつてきて、通りかかる何人かが何事かと沙英たちを見る。こんな状況から早く抜け出したいと思ひ始めた沙英は、話を区切つてそう訊いた。

??「少しだけ訊きたいことがあつてね」

??桜田の答えに、沙英は眉をひそませた。助けられてから、警察に保護され、そこで根掘り葉掘り訊かれたことを思い出したのだ。特に酷い訊き方をされたわけではなかつたが、それでも思い出したくない記憶を訊かれるというのは、気分のいいものではなかつた。どうせ訊かれるなら、自分を助けてくれたあの警察官に訊かれないな、と沙英は何度も思つたが、覚えていたのは声だけなのでどうしようもなかつた。

??「……じゃ、じゃあ、ここじよなくて、もつと静かなところで……」

??「いや、そこまでして訊くようなことじゃないんですよ。このところ、あなたの周りにストーリーカーのような奴がうるついでいませんか、とだけ訊きたかったんですよ」

??「……いませんけど」

??「そうですか。なら、私からはもう何も訊くことはありません。あなたから何か質問はありますか？」

??「……ありません」

??沙英は早くこの二人から逃れて教室に入りたかった。だからそう言ったのだから、刑部は驚いたような顔をした。

??「意外ですね。もつと訊かれると思っていました」

??「もう行つてもいいですか？」

??「ええ。時間取らせて悪かったわね。それじゃ」

??桜田は明るく手を振つて、近くに停めてあつた車に乗り込み、すぐにエンジンがかかり、どこかへと行つてしまった。覆面パトカーかな、と二人は思った。

??「……あんなのが警官？」

??「でも、私が出つた中では、とてもいい人だよ」

??「あれでいい人の部類とは、日本の警察も終わつてるわね」

??刑部　？敬二、桜田　？桂香。彼らが警察一の問題児であることとを、二人は知らない。

??「そうかな。悪い人を捕まえてくれるなら、私はそれでいい」

??「……そうだね」

??二人は黙つたまま、教室まで歩いた。友の沈黙は気まずさからだったが、沙英の沈黙の理由は緊張からだつた。自分が一体クラスでどう思われているのか。それが気になつて仕方がなかつた。もしかしたら、どこかのテレビ局がやっていた狂言誘拐説を信じている人間が、いるのかもしれない。

??「……どうする？　？怖いんなら、保健室連れてつてあげるよ？」

??「いい、いいよ。頑張る」

??そうはつきりとした意思を示した沙英の胸には、事情聴取をした警察官の言葉がはつきりと浮かんでいた。

??『殺害目的で誘拐されて、助かった例なんてほとんどない。犯人が三日とか一週間とかかけるのは、君を攫った犯人のよう殺し方を調べるためじゃなく、大抵が、その、長く苦しめるためだ』

??だから、マスコミは助かった沙英が珍しく、標的にしたのだった。誘拐されて、助かった命。ただ怖いという理由だけで安全な家に引きこもっていても、恩人に申し訳が立たない。生まれ持った正義感をもつて、沙英はそう考えていた。

??「……無理しなくていいって言ってるのに」

??「あ、あの人を探さなきゃいけないの。もしかしたら、クラスにあの人のこと知ってる人がいるかもしれないし」

??「……やれやれ」

??沙英の意地を張るような言い訳に、友は肩をすくませた。

??「おはよう……」

??沙英は力なく教室の扉を開けた。教室にいるクラスメイトの視線が、一挙に集まる。もう殆どのクラスメイトは教室にいた。なぜ、こんな時間に? そんな沙英の疑問はすぐに解決される。

??「……もう、こんな時間??」

??時刻は八時前。あの人たちの会話は手早く済ませたつもりだったのに、こんなにも経っていたなんて。沙英は降り注ぐ視線におのきながらそう思った。

??「はい、ぼーっと突っ立ってないで入った入った! ?ほら、

あなたの席はここよ」

??沙英の気持ちを引き上げるようにつとめて明るく振る舞う友は、沙英の手を引っ張り、沙英の席まで連れていき、着かせる。

??「ほら、ここがあなたの席。覚えてるでしょ? 学校も、私た

ちも、何も変わってないわ。だから、安心して」

??私たちは、変わらずに接する。友はクラスメイトを代表して、その意思を沙英に示した。

?? 「沙英ちゃん、休んでなくて大丈夫？　？まだ三日よ？」

?? 沙英と仲のよかったクラスメイトが一人、近づいてきてそう言った。

?? 「そうそう。もつと寝とけつて。捕まってる間まともに寝れなかつただろ？」

?? クラスの中心になっっている男子が、沙英に声をかける。

?? 「あんたは眠ることしか頭にないのか」

?? 友の友達がやってきて、彼にツツコミを入れる。

?? それからも、次から次へとクラスメイトがやってきて、沙英に話しかけたり、心配するような声をかけたり、慰めようとしたりした。それらの中に沙英を罵るようなものはなかった。

?? 「……みんな……」

?? 何気ない心配する声が、沙英の心の奥にまで届く。目に涙が溜まり、沙英の世界が潤んでいく。

?? 「……ありがとう……」

?? 「気にしないで」

?? 「気にするなよ」

?? 「大丈夫大丈夫」

?? 「気にしなくていいよ、沙英ちゃん」

?? 罵られるかも、変な目でみられるかも？　？私はなんてバカな心配をしたんだろうか。こんなにも、いい人たちなのに。

?? 沙英は周りで優しい言葉をかけてくれるクラスメイト達と会話を交わしながら、そう確信した。?? 始業を告げるチャイムが鳴った。沙英の周りにいるクラスメイトは、少しずつ自分の席に着いていく。

?? 「……さ、今日も授業始めるぞ」

?? だるそうな表情で、担任の教師が入ってきた。そろそろ初老を迎えようかという年齢の男性だ。

?? 「……日割、来ていたのか」

?? 「はい」

?? 彼は教室に沙英の姿がある事に気が付くと、驚いたような顔をした。

?? 「…… 昼休み、職員室に来るように」

?? 「わかりました」

?? 沙英は何の話だろう、と思いつながら頷いた。

?? 「よし、今日は学年末テスト前だからな、授業の速度早めるぞ。

教科書百二十ページを開いて……」

?? 国語の教師である彼は、足早に授業を始めた。まるで、そうすることによって沙英からの質問を回避するかのよう。

?? 「……」

?? 友や他のクラスメイトは、沙英がなぜ呼び出されるのかを、知っていた。

第三話

? 酷く、落ち着かない。授業を受けているうちに沙英はそう思うようになっていた。視線が痛い。突き刺すような、ねっとり絡みつく嫌な視線が自分の全てを見つめている。そんな錯覚を彼女は抱く。クラスメイトのものではない。ならば、誰か。

? 「……そんな」

? 沙英はその人物を確信して、小さく、小さく呟いた。

? 教壇に立つ男性教師。彼が、事あるごとに沙英を見つめるのだ。まるで、酷く下卑た物を見るような、とても汚らわしい物を視界に入れていくような、そんな目で。それだけでなく、沙英のことや、事件を暗喩するようなことをこれ見よがしに話題にあげてくる。沙英にはそれが嫌がらせのように感じて仕方がなかった。

? 「……」

? それから先、沙英はその視線と嫌がらせに晒され続けることになる。休み時間はクラスメイトが優しく話しかけてくれるが、それでも安息には繋がらない。うれしいことにはうれしいのだが、誘拐犯の顔が頭に浮かんで離れなくなるから、沙英は安心や休息は得られないのだ。

? 少しづつ、希望を持っていた学校にさえ彼女は怯えを感じるようになってくる。

? 「……さ、教科書開いてね」

? 唯一の例外は三時間目の女性教師だった。彼女は教師の中で初めて、沙英に優しさを向けた。それが沙英には嬉しかった。

? この人が、私の担任だったら……。

? 今の沙英には、そんな他愛ない夢想さえ、遙か彼方を思うのよう
に思えた。

? そして、昼休み。

? 「……もう、いや」

? 終始下卑た表情を沙英に向けてきた四時間目の教師の授業が終わり、昼休みになると同時に沙英は机に突っ伏した。

? 「沙英、大丈夫!？」

? 驚いた友が慌てて駆け寄った。

? 「ゆ、友……。ご、ごめん、心配、かけたね」

? その心配そうな友の様子が沙英には申し訳なく思えて、気丈に振る舞う。

? 「大丈夫だつて。何があつたの?」

? 「……なんにも、ないよ」

? もしかしたら、全部私の気のせい、ううん、全部妄想かもしれないのに、相談なんてできないよ。

? ? 沙英はこの六日間で、自分に対する自信をすっかり失っていた。もしかしたら、自分がこんなに怖いのは、事件後のトラウマでできた被害妄想なのではないだろうか。そんな思いを沙英は振り払うことができなかった。だから、確証が取れるまで、自分を信じられるまで、沙英は言うつもりは一切なかった。

? 「……先生達ね?」

? 「どうして、そう思うの?」

? 驚いたように、沙英は言った。

? 「私たちがじゃないんでしょ?」

? 「うん」

? 迷わずに、沙英は言う。クラスメイト達の言葉で誘拐犯を思いだして気分が悪くなってしまいが、それでも沙英は嬉しかった。

? 「なら、あいつらしいじゃないじゃん。今から職員室行くんでしょ?」

? ? ついて行ってあげる」

? 「え、いいよ」

? 沙英はふるふると首を振った。

? 「よくない。もし、何かあつたらどうするの?」

? 何かつて、何? ?

? 沙英は、それを訊けなかった。何を言われるのか全く想像できなくて、言いようのない不安に沙英は襲われる。

? 「……………うん、わかった」

? 沙英はおずおずと言った。

? 「よし、じゃあ、行こう」

? 友に手を引つ張られ、沙英はあの時のことを思い出す。恩人に助けてもらった、あの時を。あの時もこうして、手を引かれていた。

あの時は何がなんだかわからなくて、怖かったけど、今は違う。今はとても安心できる。友は自分を守ってくれる。そんな確信が、沙英の中に確かにあった。

? 「……………ゆ、友」

? 「大丈夫、私がいる」

? 教室を一步出ると、そこはもう、沙英の知らない学校だった。いつもの何気ない廊下に、たくさんの人と、視線が向けられている。好奇、疑惑、それらを強く含んだ視線の海に、沙英は酔いそうになった。

? 「ごめん。さすがに、クラスの外までは、無理だった」

? その言葉からは、友が沙英のために努力したという事実がにじみ出ていた。

? 「……………ううん。助かってる」

? もし、友がそのクラスの中さえも努力しなければ、沙英はもう二度と学校に来ようとは思わなかっただろう。

? 「……………沙英、着いたよ」

? いつも通りの、職員室の扉。しかし、沙英にはここが死刑台につながる扉のようにも思えた。

? 自分は罪人なのだ。なんの罪を犯したのかもわからない。けれど、どこかで、攫われて、人生をめちゃくちやにされるほどの罪を犯したのだ。

? 沙英は事件の原因を自分に向けることで、精神的負担を減らそうと無意識に考えていた。

?「……」

?「だから、沙英には職員室の扉が死刑台に見えたのだ。」

?「友が扉を開き、職員室に入る。続いて沙英が入って、二人して驚愕した。」

?「……あんたら、なにしてんの?」

?「教師になんて口の利き方だ」

?「じゃあ教師らしいことしてよ」

?「入り口を、教師達が困うように集合していた。入って一番目につきやすい正面には、強面で知られる教師達が陣取っている。その陣形はまるで、ここに来る生徒を威圧するために組んだかのようだった。」

?「……そもそも、なぜ大臣、お前がいる。私たちは日割だけを呼んだのだが」

?「ただの付き添い」

?「なら帰れ」

?「帰れるか」

?「真正面にいる担任と、友は睨み合う。」

?「停学にするぞ」

?「教師らしいこととしてよ、って言ったよね。脅すのが教師らしいこと?」

?「黙れ」

?「黙らない。そもそもこんな風に集まってどうする気だったのさ? ?もしここに沙英しか来なかったら、あんたら何する気だったの?」

?「あんまりだ。」

?「友は思った。あんまりにも、酷すぎる。何、これ。まるで、数で脅すみたいなこととして、沙英に何を……。」

?「何も。ただ、話をするだけだ。安心したならとつとと教室に戻れ」

?「戻れるか。あんたら変だ。私も同席する」

?「……これは生徒のプライバシーにも関わる。無関係の生徒に」
?「無関係なんかじゃ、ありません」
?沙英は言ってから、自分でも驚いた。
?「……なんだと?」
?「無関係なんかじゃ、ありません。友は、私の友達です。私を氣遣ってくれた、優しい友達です。……無関係だなんて、言わせません」
?「そこまで言って、沙英はようやく気付く。
?ああ、そうだ。私、もう誰もいないんだ。と。
?沙英の両親はもういない。彼女は天涯孤独である。だから、教師達の言うところの『関係のある』人間は、もういないのである。沙英は、その事がまるで自分が誰かとどれほど仲良くなっても『無関係』である、と突きつけられたように感じたのだった。それが酷く寂しいことに思えて、沙英は口を開いたのだった。
?「……そうか。仕方ない、そこまで言うなら、大臣、お前に同席を許そう」
?「ずいぶん偉そうじゃない? 私たちの授業料が飯のタネのクセに」
?「ふん。それはお互い様だ。私達皆が辞めれば大学にも行けないクセに吠えるな」
?「……早く、話をしましょう」
?激しく口喧嘩する二人に嫌気が差した沙英は、たまらなくなつてそう言った。
?「……わかった。こい、二人とも」
?担任が指差した先は、応接室。担任がそこに入ると、他の教師達もぞろぞろと、応接室に入った。最後に、沙英と友が入る。
?「……友、ごめんね」
?「それを言うのは、まだ早いと思うよ。あと、ごめんじゃなくて、ありがとうって言うって欲しいな」
?「……うん」

?友を先頭に、二人は応接室の扉を開けた。

第四話

?? 「失礼、します……」

?? 沙英は怒気を孕んだ教師達に怯えながら応接室に入った。

?? 「失礼しますっ！」

?? そんな沙英とは対照的に、友は教師達以上に憤りながら入る。

?? 「座れ」

?? 命令口調の担任に友は素直に従い、彼の向かい側にあるフカフカのソファアーに腰掛ける。

?? 友は従わず、応接室の入り口前に直立不動。

?? 「どうした。座れ」

?? 「私はここで聞く」

?? 「……ふん」

?? 短く息を吐いて、担任は沙英に向き直った。

?? 「話がある」

?? 「はい、なんでしょう？」

?? 「辞めてくれ」

?? 「……え？」

?? 沙英は、何を言われたのかまるで理解できなかった。

?? 「ねえ、なによそれっ!?!? そんな話聞いてない!」

?? 「今言っただ」

?? なんでもないことのように言っているが、彼の周りの教師達の顔には、疲弊の色が滲み出していた。

?? 「……な、なにを、ですか？」

?? 「学校を、辞める」

?? 「……そ、そんな、どうして」

?? 沙英は目を見開いたまま首を振る。

?? 「どうして、だど? ? お前のせいで、我が校の信用はガタ落ちだ。連日連夜抗議の電話、説明! ? お前が辞めれば全てカタが

つくんだ。そういう連中に、『そんな生徒はこの学校におりません』とな！」

??「で、でも」

??「それにな」

??「必死で抗弁しようとした沙英に被せて、担任は言った。」

??「お前が助かったのは、犯人と通じてたからだろ？」

??「え」

一層、沙英の驚きは大きくなる。

??「お前が、その身体で、犯人をたぶらか」

??「いいかげんにしてっ！」

??「友は応接室の扉を思い切り叩いた。木が爆ぜる時のような激しい音がして、教師達はもちろん、放心状態になった沙英も友を見た。??「あんたら、何よ！　？少しは必死で逃げてきた沙英を気遣おうとか、そういう思考にはいたらないわけッ！？」

??「同情しろと？　？無理だな」

??「なんでよ！」

??「お前は、道に立つ女に同情できるのか？」

まるで汚物でも見るような目で、彼は沙英を見る。

??「……あんた、今自分が何言ったかわかってる？　？自分の受け持ちの生徒を、売女扱いしたんだよ？」

??「わかってるとも」

??「なんでそんな酷いことを言えるの！？」

??「酷い？　？酷いのは日割だ。警察に助けられるのならまだしも、自力で逃げてきたんだからな。誘拐されたと言うのも本当かどうか」

??「そんなの全部想像じゃない！」

??「お前がそう言えるのは、日割から話を聞いているからだろっ」

??「……日割の話が嘘だとは、まるで思わなかったのか？」

??「少なくともあんたたちよりはずっと信頼できる！」

??「そう思わされているだけかもな」

?? 「なんだとこのっ……」

?? 「もう、やめて」

?? 殴りかかるうとした友を、沙英は止めた。

?? 「どうして止めるの、沙英！　？あなた今まで話聞いてたでしょ！？　？こいつら、あなたのことをば」

?? 「言わないで」

?? 沙英は悲しく微笑んだ。

?? 「っ」

?? 「友。お願いだから、そんな言葉、言わないで。私は、大丈夫だから。何も、心配いらなから」

?? そんなふう強く振る舞う沙英に、友は激しい後悔に襲われた。
?? 私は、なにを。沙英のために、沙英を幸せにするためにこうしてここににいるのに。なのに、こうして無理させて、何をしているんだろう。

?? 「……ごめん、沙英」

?? 「ううん、いいの」

?? 沙英はうなだれる友に微笑むと、担任の方を向き、その微笑みのまま、言葉を紡ぐ。

?? 「少しだけ、考えさせていただけませんか？　？私のお金でここに通っているわけではないので、『両親』とも相談してみないことには、なんとも」

?? 「……？　ああ。構わんが、明日までだぞ」

?? あまりにも自然な沙英の物言いに、担任はつい、頷いてしまう。
沙英に両親がいないことは、彼とて知っていたことなのに、頷かざるをえなかった。沙英は笑顔で、明朗に次々と饒舌に言葉を、理由を話す。声は明るく、手ぶりもきびきびとしていた。だが、表情はない。瞳はどこも、映していない。

?? 「やはり学校をやめる、という一大事、友達にも相談しなければなりません。それに将来の不安もあります。もしかしたら、なぜ辞めるのかと両親に怒鳴られるかもしれませぬ。……それでも、明

日ままでしょうか？」

?? 「……ああ」

?? 隣でその様子を見ていた友は、違和感を感じていた。沙英のこの機転は目を見張るものがある。それにしてもこんな嘘、担任である彼が見抜けないはずがないのに。どうして、誰も気付かないんだらう。

?? 「そうですか。では、失礼します」

?? 事件後の沙英とは思えないほどはきはきと、彼女は言った。友のところまできて、その手を引いて応接室を挨拶もなしに出る。教師たちは、あまりに早い沙英の対応に、止めることすらできなかった。

?? 「……沙英、凄かったね、さっきの」

?? 教室まで帰る途中、友は自身の手を引いて前に行く沙英にその声をかけた。

?? 「……さっきの、って？」

?? 沙英の足が止まると、おのずと友の足も止まる。沙英が振り返り友を見た。

?? 「あ、あの、嘘、だよ。よくあんなふう……」

?? 「……え？ うそ？ ……あ、そうだった。おとーさんたち、死んじゃってたんだ」

?? 何も映さず、どこか遠い虚空を見つめる沙英に、友は自身の失敗を悟った。

?? 「だ、大丈夫、沙英？」

?? 「大丈夫？ うん、大丈夫。大丈夫よ。そう、大丈夫……」

?? 「……ね、ねえ！」

?? 友は、自分に言い聞かすように何度も呟く沙英に大声で声をかける。

?? 「なに？」

何か言わなきゃ、何か言わなきゃ。ある種の強迫観念に突き動かされ、友は思いついた言葉を口にする。

??「あ、あの、沙英の家、行ってもいいかな!？」
??「……………どうして?」

??「少しだけ、沙英の瞳が焦点を取り戻す。」

??「ど、どうしてって……………。そ、そう、今日ちょっと遊びたくなつたから!」

??「私の家、なんにも、だあれもないよ」

??「別にいい! ? 沙英がいたら、それで十分!」

??「本当に?」

??「沙英はようやく、さつきまでと同じ目の色を取り戻した。彼女は、沙英がいたら、という言葉でやっと今の自分を取り戻したのだつた。」

??「本当本当! ? だから、楽しみにしてて!」

??「……………うん」

??「友の横に並んで、沙英はまた歩き出す。沙英の顔色は絶望に満ちていて、とても友と遊べるような状態ではなかった。にも関わらず、彼女は楽しみにしている、と優しく言った。」

??「そんな沙英を見て、友は今とさつき、どちらの方が沙英にとつていいのだろうと考えていた。」

??「どこも現実を見ていないが、何も感じずにいる沙英。」

??「現実をしっかりとみつけているが、ボロボロになつていく沙英。」

??「果たしてどちらがいいのか、友には判断できなかった。」

??「あと二時間だから、沙英……………」

??「あと少しだけ、耐えて。友は最後まで言うことができなかつた。そんなこと、言えるはずがない。」

??「……………うん。大丈夫だよ、友。私は、耐えられる。……………みんながいるから」

??「優しげに友を気遣う沙英が、友にはとても痛々しく見えた。」

閑話

? 廠戒態勢をしく街の中、大臣と書かれた表札がかけられた一般家屋のリビングでは、一人の少女が塞ぎ込んでいた。

? 「……どうしよう、お父さん、お母さん」

? 行方不明から誘拐へと扱いが変えられた少女、日割 ? 沙英の友人、大臣 ? 友だった。

? 「大丈夫だ。お前はここにいるし、俺もここにいる。お前はさらわれたりなんかしない」

? 「違うツ! ? そうじゃない!」

? 優しげに元気付けようとした父親を、友は怒鳴りつける。

? 「私のことよりも、沙英が……! ? 沙英が、攫われたって……」

? ? 友は沙英のことを心の底から親友だと思っていた。

? ? 「沙英ちゃんが攫われたって、本当に?」

? ? 友の母が心配そうに訊いた。彼女と沙英は、何度も話している。

友の母も、とても親しみを持っていた。

? ? 「そうだよ、お母さん。ねえ、どうして犯人は沙英を攫ったの?」

? ? 沙英、助かるかな?」

? ? 沙英に死んで欲しくなかった。沙英の声が、笑顔がまた見たい。

そんな気持ち友の中で生まれた。

? ? 「……きつと、助かるわよ」

? ? 友の母は、嘘をついている、と自覚していた。

? ? 「助かるわけがない」

? ? 「あなた?」

? ? 「お父さん?」

? ? 友の父は、子供に嘘を教えるのが嫌いだった。たとえ辛い現実だろうと、嘘はつかずに育てようと、彼は決めていた。

? ? 「攫われて、そのまま生きて帰ってくるなんてこと、めったにありはしない」

??「どーして!？」

??「……自分で考える」

??彼は答えに窮して、反射的にそう答えてしまった。

??「……もしかして、沙英、もう殺されてるかもしれない」

??友の脳裏に、殺されてどこかの森にうち捨てられている親友の姿が浮かぶ。

??「……ほ、本当に、殺されるだけ、なのかな」

??友は一瞬だけ、身の毛もよだつような恐ろしい想像をした。

??「なんで攫ったんだろう。」

??そんな疑問が、パンドラの箱だった。

??「どういうこと？」

??「も、もしかしたら」

??「言いかけて、やめる。もしかしたら、何? ?それを言っ、何があるの？」

??沙英が攫われてからもう二日。犯人が『そういう』目的で攫ったのだとしたら、もしかしたら、もう、愉しみきっているかもしれない。

??「もしかしたら、なに？」

??母が、友に訊く。

??「も、もしかしたら、生きて帰ってくるかも、しれないじゃない」

??「確かにな。限りなく確率は低いが」

??「もし、帰ってきたら、沙英、辛い事になると思う」

??「……そうね」

??「もし、もし、沙英が家にいるのも辛い、って私に言ってきたら、その時は、家に連れてきてもいい？」

??「なぜ、見ず知らずの他人を家に入れなければならん」

??父親は冷たく言った。けれど、彼の本心では、是非とも連れてこい、と言っ、てやりたかった。けれど、それではだめだと、同時に彼は思う。そんな、いい事づくめで世界はできていない。きつと、

様々な困難が待ち受けている。父親の自分の反対を説得できるくらいではないと、困難を受ける覚悟があるとは言えない。

??「……見ず知らずじゃ、ないよ。私の、友達」

??「友達か。それだけか？」

??「大切な親友！ ? 絶対、助けてあげたいの！」

??「……もし、ここで匿うことを許されたとして、どうするつもりだ」

??「え、ど、どうするって」

??「もし、心に傷を負っていたら？ ? 身体に傷を負っていたら？ ? トラウマだつてあるかもしれない。会話にも、行動にも気をつけなければならぬ。一つでも間違えば、待っているのは激しい拒否だ。ここが安心できる場所だと『大切な親友』に思わせたいなら、一度も間違つてはいけぬ。お前にそれができるのか？ ? 마찬가지로知識もなくいけぬ」

??「友は言葉に詰まつた。何も、何一つ言い返せない。

??「あなた、何もそこまで言わなくても……」

??「ごっこ遊びとは違うのだ。お前の友達は、必ず変わつていくはずだつた。その変化に、お前は耐えられるのか？ ? もしかしたらとてつもなく嫌味な人間になつていくかもしれないぞ」

??「そんなことない！」

??「自分が攫われた原因を世界のせいにしたら、世界を呪う人間になるだろう。お前に原因を求められるかもしれない。その時、たとえばお前が何もしていなくても、お前は憎まれるのだ。それでも、献身的に沙英を保護すると？」

??「友の子供っぽい楽観を、彼女の父は片端から砕いていく。

??「そ、そんな、そんなこと、沙英が、私を憎むなんて」

??「ありえない、と思うならこの話はなしだ。おそらく事件が終わり、助かったのなら、お前の友達の居場所は両親の所以外にはないだろう。学校も、友達もアテにあらぬはずだ」

??「な、なんで学校が」

?? 「事件後、説明を求められるのは学校だ。それを向こうが疎ましく思つたのなら、お前の友達は辞めさせられるだろう」
?? 「そんなつ！」

?? 「その上、両親までもが沙英を否定してみる。世界全てを呪う悲観主義者になつても不思議ではない」

?? 「そ、そんな」

?? 沙英が、あんなに楽しそうに人生を謳歌していた沙英が、そんなことになるはずが……。

?? そこまで思つて、友はそれらを全部打ち消した。

?? 「……どうすれば、いいの」

?? 「何がだ？」

?? 「どうすれば、沙英を家に連れてきてもいいの？」

?? 「話を聞いていたか？」

?? 「聞いてた！ ? 私を憎んでも、世界を呪つても、沙英は沙英だ。今までの沙英じゃなくても、沙英だ！ ? 私は親友を助けたいのっ！」

?? 「……そうか」

?? 彼は、優しげに微笑んだ。

?? 「それだけの覚悟があれば、なんとかなるだろう。連れてきてもいいぞ。……もつとも、生きて帰ってくれば、の話だがな」

?? 友と母親は、一拳に笑顔になった。

?? 「ありがとう！ ? お父さん！」

?? 「ありがとう、あなた！」

?? 「……だから、生きて帰ってくればの話だと言っている……つて、聞いてない」

?? この次の日、沙英が自力で誘拐犯から逃げ出したというニュースが流れ、大臣家は手放しで大喜びした。……このニュースを聞いて、何も言わずに生還を喜んだのは、この家族だけであった。

第五話

? 沙英の家は、ごく普通の一般家屋で、友の家と大きさもそう変わらない。

? 「さ、どうぞ上がって」

? 「うん。お邪魔します」

? 「いらっしやい」

? 沙英は微笑もうとして、できなかった。悲しげな表情のまま、友をリビングへと案内する。

? 「昨日も来たけど、やっぱり広いな、沙英の家」

? 「うん。一人で使うには、広すぎて」

? 昨日のように、沙英は友に椅子を勧めた。友は特に遠慮もせず、ちよこんと座る。

? 「……ねえ、友」

? 「ん〜?」

? 友は軽く答えるが、内心は冷や汗をかいていた。大丈夫だろうか。本当に何も無いのだろうか。

? 友は職員室を出たすぐの沙英を思い出す。両親が死んだことも忘れ、何も映さず、虚ろに遠くを見つめる瞳。あのときの沙英の表情が、友は忘れられなかった。もしかしたら、あの顔が、今の沙英の本当の表情だとしたら? ? 今こうして悲しそうにしたり、無理に微笑もうとしたりする沙英はみんな、無理して繕っているじゃないだろうか。

? 「私、学校、辞めるね」

? 「どうして?」

? 危うく叫びそうになった自分をこらえて、友は冷静に訊いた。

? 「……もう、耐えられない」

? 「わ、私達がいるよ」

? 無情にも、沙英は首を振った。

? 「ありがとう。本当に、助かった。でも、先生たちがあんなこと思ってただなんて、思わなかった。多分、辞めない、って言っても辞めさせられると思う。……もしかしたら、直接的に訴えてくるかも、しれない」

? 「直接的に、って?」

? 「……攫つて、監禁して、それから……」

? それからは、声にならなかった。

? 沙英の中で全てを占めているのは、その恐怖。

? もしかしたら先生達も犯人のように、私をどこかに連れ去って監禁して、好き勝手するかもしれない。

? 冷静に考えればありえない、と結論付けられる考えを、沙英は確実に迫る未来のように感じて仕方がなかった。

? 「……でも、それじゃあ」

? 友が、そんなことあるわけないじゃん、なんて軽い言葉を沙英に言えるわけがなかった。けれど、危なかったのは事実。あと少しで、そう言っていたかもしれない。

? 「……ねえ、友。少しだけ、聞いてくれる?」

? 「う、うん」

? 今までの話の流れを切るように沙英は言った。まるで、学校のことなど思考の端にも入れたくない、というかのよう。

? 「私ね、嬉しかった」

? 「なにが?」

? 「友が、ここに泊まってくれて、って言ってくれて」

? 嬉しい、と沙英は言っている。けれど、顔は全然嬉しそうじゃない。無理をしているのだろうか。それとも、感情が麻痺して、何も感じていないのだろうか。友は沙英の内心を必死で理解しようとする。

? 「もし、ここに友がいなかったら私ね、死んでたかも」

? 「そんな。沙英が死んだら、悲しいよ」

? 「……友は、悲しんでくれるんだね。先生達は、私が死んだら嬉

しいみたい」

? 昼間の教師達を思い出して、友はまたはらわたが煮えくりかえるような感情を抱く。

? 「……まさか、あんな奴らの為に死ぬつもりだったの?」

? 沙英は静かに首を振った。

? 「ううん。でも、少しだけ疲れちゃって。ごめんね、友。せつかく来てくれたのにこんな話して。ごめんね、あんな話を、友に聞かせて。ごめんね、ごめんね」

? 「沙英……」

? 友は立ち上がり、謝り続ける沙英を抱きしめた。

? 「え、きゃっ」

? 沙英はちいさく叫んだが、取り乱したり、暴れたりはいしない。どうして抱きしめられたのかわからなかっただけで、特に拒否する理由もなかったので、沙英はされるがままにすることにした。

? 「……沙英」

? 「なに、友?」

? しつかりと、沙英を抱き締めて、友は言った。

? 「……無理、しないで」

? 「え、なに、が?」

? 「……私は、沙英の親友のつもり。沙英はどう?」

? 「私も、だよ。私も、友の親友でいれたら、って思う」

? いれたら、だなんて。友はその謙遜が苛立たしかった。事件の前なら、自信を持って親友だ、と言ってくれたはずなのに。沙英をこんなにしたのは誰だ。

? 友はするどい怒りを犯人に向ける。

? 「ねえ、私は、覚悟してるよ」

? 「……何を?」

? 「だからさ、なんでも、話してよ。どんなことでもいい。絶対ないがしろにしないから、相談してよ」

? 答えはなかった。けれど、されるがままの沙英が、おっかなびっ

くり、友を抱き締め返した。

? 「……私、ね。嬉しい、よ」

? 「ありがとう」

? 友は優しく言った。

? 「……嬉しい、はずなの。辛い、はずなの。悲しい、はずなの」

? 友は沙英がやっと近くに來てくれたような感覚がした。今までは取り繕っていた、仮面の沙英。そしてようやく、その仮面の下を見せてくれた……。そんな感覚。

? 「必死で嬉しいって思うとするの。頑張って辛いって感じようとするの。どうやってたら悲しめるか考えてるの。でも、なんにも思わないの。まるで凍りついたみたいに、嬉しくないし、悲しくないし、辛くないの」

? 友は酷く驚いた。ここまで言ってくれるとは、思っていなかった。

? 「事件が終わったときはそうでもなかったんだけど、昼間、先生達に辞めろって言われたとき、頭が真っ白になって、それから。それから、私は……」

? 嗚咽をこぼすこともなく、淡々と冷静に沙英は言った。

? 「ねえ、私どうしちゃったんだろう? 悲しくないとか辛くないとかはいいんだけど、友に優しくしてもらって、嬉しくないとか喜ばないとかは、嫌なの。嫌な筈なんだけど……」

? ? 沙英の独白を聞きながら、友は考える。どうして沙英がこんなことになったのだろうか。

? ? 「大丈夫だよ。無理して喜ぼうとしなくてもいいから。ね?」

? ? 「……うん」

? ? 「ん、よし! ? ねえ、沙英。明日ちょっと遊びに出ない?」

? ? 「え? ? でも、学校……」

? ? 「サボっちゃおうよ!」

? ? 「……うん」

? ? 微笑んで、沙英は言った。もし事件の前なら、きっと嬉しいだろう。そんな推測からの反応だった。

??「じゃ、今日はもう寝ちゃう?」

??「……うん。一緒に寝てくれる? 最近、寝つきが悪くて…」

??目が覚めて、またあの場所だったらどうしよう。本当の自分は今すごい拷問を受けていて、その逃避として、こんな、幸せな夢を見ているのでは、という怯えが、沙英の睡眠を妨害していた。

??「うん、わかった。一緒に寝れば、きっとよく眠れるよ!」

??「……ありがとう」

??本当に私は感謝を感じているのだろうか。沙英は自分の感情にさえ、自信が持てなかった。今感じているのは本心からののか、それともそう感じなければと思った自分が作り出したものなのか。だんだんバラバラになっていく自分を、沙英は感じていた。

??「さ、お布団、用意しないと……」

??それを隠して、沙英は何事もないかのように振る舞う。

???

第六話

?? どうやって虐めぬこうか。

?? 男は暗い感情のままにパソコンでサイトを巡る。あらゆる苦痛をあの子に与えるんだ。くふふ、きつと気持ちいいだろうな。遊んであげなきゃ、早く、早く。

?? 画面には残酷な映像がいくつも並んでいる。裸に剥かれ、臓腑をさらし、苦悶の表情を浮かべる女性の死体。そんな写真がいくつもいくつも。

?? ううん、道具がないなア。じゃ、身近にあるモノでしようか。

?? 彼はまず爪切りを思いつく。次はミキサー。それはなかったから、買いにいかなば。次は、次は。そんなふうになら次へと残酷で醜悪な想像を頭の中で繰り返す。その想像が終わるころには、想像の中の少女は人とも何ともつかぬ肉塊へと姿を変えていた。

?? …… くふふ、楽しみだなあ。

?? 彼は暗い暗い想像を弄ぶ。それを実行に移そうとするまで、あと数時間。

?? 「いやあああつ!？」

?? 沙英は飛び起きようとして、出来なかった。体が思うように動かないことに気付くと、沙英の心は一気に冷え込む。摂氏0度以下をはるかに通り越し、絶対零度に一瞬でたどり着く。心の全てが凍りつき、何もかもが動かなくなる。

?? また攫われたのか、それとも今までのが夢だったのか。

?? 沙英はそれを判断しようとして首をひねって……安堵した。

?? 「……友」

?? 心に温かみが戻ってくる。感情が少しだけ氷解し、抑えていたものが溢れ出す。

?? 「脅かさないでよ、友」

??「よかった、本当によかった。友が隣にいてくれて、本当によかった。」

??「……沙英……?」

??「友がむにやむにやと目を覚ました。」

??「おはよ、友」

??「う、うん、おはよ、沙英」

??「昨夜の暴れっぷりと余りに違う沙英に、友は戸惑う。」

??「……あの、友、ちよつと離して……。その、恥ずかしいよ」

??「本当は犯人と友を重ねるのが嫌だったからだが、沙英は嘘をついた。」

??「あ、ごめん」

??「慎重に友は沙英を離れた。」

??「沙英、寒い?」

??「え?」

??「だって、腕抱えてるから……」

??「沙英は自分でも気付かないうちに、自分で自分を抱き締めていた。」

??「え、あ、う、うん。ちよつと、寒いかな……?」

??「暖房つける?」

??「い、いいよ。学校、いかなきゃ、いけないし……」

??「なんで?」

??「なんでつて……」

??「今日はサボリ! ?でしょ?」

??「沈み込み始めた沙英を引き上げるように、友は明るく言った。」

??「……そう、だったね。サボリ、なんだよね」

??「辞めるでも、逃げるでも意思表示でもなんでもなく、ただのサボリ。本来の沙英なら許さなかっただろうが、今は違った。いつもの日常に戻れたような気がして、嬉しかったのだ。」

??「そうそう。ぱあーっと遊んで、楽しもう」

??「あそぶ……」

?? 沙英の脳裏に犯人が浮かび上がる。友に心配をかけたくない一心で、その映像を振り払おうとする。沙英にはそれができないばかりか、表情にまで出てしまっていたようだ。

?? 「い、一緒に、ゲームとか、しようよ」

?? 「うん？　？　そうだね！」

?? あえて遊ぶという単語を避けて、沙英は言った。

?? 「…………。ね、ねえ、友」

?? 「なあに、沙英」

?? さつきはごまかせた。けれど、これからもずっとごまかせ続けることは出来ない。沙英は感じた。それに、友はきつと、受け止めてくれる。そう信じて、沙英は打ち明けようと決心する。

?? 「私ね、いろんなことから、あ…………」

?? 「あ？」

?? なんて呼べばいいんだろう？　？　沙英はふと、疑問に思った。

あいつ？　？　そんな風に扱って、大丈夫なの？　そんな風にあつかって、本当になんにもない？　？

?? 「…………。いろんなことから、犯人さんのことを、思い出すの」

?? 「『犯人さん』なんて呼ばなくてもいいよ！　？　沙英を攫ったやつなんか、『あいつ』で十分！」

?? 「…………でも」

?? 沙英は刻みつけられた恐怖から、どうしても軽く扱うことに抵抗を覚える。

?? 「…………。わかったわ。犯人さんでも我慢する」

?? 「ありがとう。…………。私、『遊ぶ』っていう言葉でも、思い出しちゃうの」

?? 友はそれを聞いて気の毒そうな顔をした。

?? 「…………。な、なに言われたの？　？　辛くなかったら、話してよ」

?? 「…………。君で遊ぶために、ずっと調べてたんだ。今まで放ったらかしにしていってごめんね。今日からは、いっぱい遊んであげるから……友は顔を引き攣らせた。

?? 「な、なにそれ。本当に、な、何もされなかったの？ 大丈夫、なんだよね……？」

?? 「うん。道具……多分、爪切りだと思う。爪切り取りに行ってるうちに、助けてくれた」

?? ほう、と友は胸を撫でおろした。

?? 「……怖かったね。ごめん、無神経なこと言って」

?? 「いいよ、そんなこと。頭の中に犯人さんが出てくるのにも、もう慣れ始めたから……」

?? ぎゅっと、友は沙英を抱き締めた。

?? 「そんな、そんな冷たいこと言わないで。私がいるよ。私がそばに。だから」

?? 「ありがとう」

?? 沙英は抱き締め返す。友の体温が伝わって、心の奥にまでその熱は届く。

?? 「ほんとうに、ありがとう。友、大好きだよ……」

?? 強く強く、沙英は友を抱きしめる。

?? 「私も。私も、沙英が大好き」

?? 友は沙英を抱きしめる力を少しだけ強める。もう絶対に、誘拐なんてさせない。沙英は、親友は私が守るんだ。

?? 「……友、ありがとう。落ち着いた。さ、行く？」

?? 「そうね。じゃ、服着替えよっか。……その、大丈夫？ ？脱がされたとかは……」

?? 「大丈夫だよ、友。私、着替えるのは好き」

?? 自分は何もされなかった。それを確認できる着替えと入浴は、沙英にとっても安心してできる数少ないことだった。

?? 「そうなんだ。じゃ、どんな服着ていく？」

?? 「目立たない服」

?? 他の選択肢は存在しないかのように沙英は言い切った。

?? 「そうなんだ。じゃ、早く着替えてあそ……サボろう！」

?? 「……うん」

?? 沙英と友はいそいそと着替え始める。

?? 「……綺麗な体だね、沙英」

?? 「うん、ありがと。友もだよ」

?? 汚れもせずに、穢れも知らない綺麗な体 友は励ますつもりでそういう意味を込めたのだが、沙英は気付かなかった。

?? 「……これ、目立たないかな」

?? 着替え終わった沙英は、とても地味な女の子になっていた。ごく普通のチエツクのスカートに、白のＴシャツ。どこからどうみても地味な女の子にしか見えない。

?? 「う、うん、目立たないと思うよ」

?? 友は対象的に活発な格好だった。薄手の長袖、無地で無難な白色のＴシャツに、ダメージ加工のされたジーンズ。短い髪と相まって、女顔の男と言われれば信じてしまいかもしれない。

?? 「どう？」

?? 「にあつてるよ」

?? 「そうじゃなくて。どう見える？」

?? 「どうって、友にしか見えないけど……」

?? 「男に見える？」

?? どうしてそんなこと言うんだらう、と思いつつも沙英は友の格好を見つめる。

?? 「……見えないこともない、かな……？」

?? 「よし！ ? それじゃ、私は今から沙英の彼氏！ ? こうすれば変なのも寄って来ない！」

?? 変なのも寄って来ない、というところに沙英は惹かれた。

?? 「……じゃあ、よろしく、友」

?? 「おう、まかせとけ、沙英！」

?? 不思議なほど自然な男口調に、沙英は驚く。けれど、そのおかげでまた攫われずに済むなら、沙英はそれでよかった。

?? 「……最初、どこ行く？」

?? 玄関で靴を履きながら、沙英は友に聞いた。

??「そうね、いや、そうだな。まあ、オーソドックスにゲーセンでも行こうぜ！」

??男装をした友は、豪胆に答える。

??「……いつてきます、おとーさん、おかーさん」

??「え、えつと、オレも言ったほうがいいのかな？」

??沙英は首を振った。

??「いいよ。これは、私の習慣みたいなものだから」

??沙英は玄関を開けようとして、動きを止めた。

??「どつたの、沙英？」

??「もしかしたらまだマスコミの人たちが……」

??もし『彼氏』と家から出て行くところを抑えられたら、何を言われるかわからない。沙英はそんなことを考えた。

??「……もう三日、いえ四日よね。さすがに下火になっているかもしれないとはいえ……。油断出来ないわね」

??友は沙英の不安を笑わずに、真剣に捉える。

??「どうすればいいと思う？」

??「普通に堂々としてりゃいいのよ。私は女なんだから」

??扉を開けしぶる沙英の代わりに、友が勢いよく扉を開けた。

??「さ、友！　おいで、誰もいないよ！」

??周りを一通り確認してから、友は手招きをした。

??「う、うん……」

??でも、視線が……。沙英はそう言おうとして、やめた。こんなのは自分の被害妄想だ。自意識過剰になっているんだ。こんな一介の女子高生に、マスコミがどうして四日間もつけまわすだろうか。沙英は自虐的にそう考えた。

??「よし、じゃ、目指すは駅前ゲームセンター！」

??「……う、うん！」

??友に合わせるように、沙英は声を出す。

??二人は駅前を目指して歩く。

第七話

?? 駅前はずいぶん平日だといふのに多くの人間が雑多に歩いていた。

?? 「うわあ〜！ ? みんなな暇なのかな？」

?? 「ちよつと、友、あんまり声上げないで……」

?? 「ごめんごめん。でも、どうして？」

?? 「も、もし、目をつけられたらどうするの？」

?? 「目をつけられたら、って……」

?? 友は、こんな風に遊びに出かけているときでも油断できない沙英を、気の毒に思った。そんなことはないんだよ、なんにも考えずに遊んでもいいんだよ、と沙英に言っただけであげたかった。

?? 「……そうだね、沙英」

?? けれど無下に否定するわけにもいかず、友は同意した。

?? 「え、えつと、ゲームセンター、どこにあるの？」

?? 気まずくなつた雰囲気振り払おうと、沙英は話題を切り替えた。

?? 「え、えつと、こつち！」

?? 友は行きつけのゲームセンターへと沙英を案内しようとしたのだが、沙英は一点を見つめたまま微動だにしない。

?? 「……友、待つて」

?? 「え？ ? つて、沙英、どこに行くの!？」

?? 沙英は友を置いて、どこかへフラフラと行こうとした。人混みに紛れて、危うく見失いそうになる。

?? 「沙英、どうしたの!？」

?? 「あの人がいた」

?? 「え？」

?? 「あの人、私の恩人がいた！」

?? 今の沙英とは思えないほど力強い足取りで彼女は進む。

?? 「いたっ！」

??「……………あれが？」

??友は、駅前で愛おしそうに街並みを見つめ佇む彼を見て驚いた。友は恩人が誘拐犯の家に乗りこんで沙英を助けたというのだから、よほど勇気のある人なんだろうと思っていた。けれど、友の想像は大きく裏切られた。華奢な体躯にひ弱そうな顔立ち。服そうは目立たないよう気を付けた風にも見える。とてもじゃないが勇気があるようには見えない。

??「あ、あのっ！」

??「……………君はっ!？」

??彼は沙英に話しかけられると、目を見開いて大きく驚いた。

??「あ、あのときは、ど、どうもありが」

??「どうして君は外にいるんだっ!？」

??「……………え？」

??お礼を言おうとした沙英の言葉に被せて、彼は怒鳴った。

??「まだ事件が終わって四日間しか経ってないんだよ!？　？　それなのに外に出るなんて、なに考えてるさ!　？　君は怖くないのか!？　それとも誰かに外に出るよう言われたのか!？」

??「え、いや、その」

??「君は無用心すぎる!　？　最低でもあと一週間は家でおとなしくしてるんだ!」

??「で、でも、あの」

??「あのもでもない!　？　さあ、早く帰るんだ!」

??彼は沙英が来た方向を指差した。

??「……………ねえ、あんた、言い過ぎだろ?」

??「誰だ、君は」

??「あんたこそ誰。名乗りなよ」

??高圧的に友は言った。

??「……………僕はか……………。シヤム」

??「偽名を名乗るならもつと違和感ないのになよ」

??「本名だよ。僕は赦武」

??「……シヤム、さん」

??沙英はなんとも言えない表情でシヤムを見上げる。帰れと言われて悲しさ半分、名前を知れて嬉しさ半分、というところか。

??「オレは大臣　？友」

??「ひ、日割　？沙英、です！」

??得体の知れないシヤムから沙英を守ろうと、友の口調は知らずと男らしくなっていく。

??「……大臣、君がここに彼女を連れて来たのか？」

??「悪い？　？気晴らしになつたら、って思ったただけだ」

??「君、この子が外に出れる状態じゃないってわからなかったの？」

??「わかつてないわけじゃないじゃん！」

??「じゃあなんで！」

??「連れてきてあげたかっただけ！　？沈んでたから、気晴らしになつてくれれば、って思っただけ……だ！」

??「それがこの子を傷つけてるってなんでわからないんだ!？」

??「ッ！　なんであんなにそんなこと言われなきゃいけないの!？」

??友は演技も忘れて怒鳴った。

??「……友、ありがと。シヤムさん、私が気晴らししたいって言ったんです」

??友をかばうように沙英が前に出て、シヤムに優しく言った。

??「……どうして警戒しないの？」

??「事件は、終わりました。終わっただんです」

??「……それは」

??「だから、大丈夫です。終わっただんですから、大丈夫なんですよ」

??「……」

??悲痛な表情で呟く沙英に、シヤムは二の句をつげなくなった。??「ほら、わかつたらとっと帰ってよ、じゃなかった、帰れ」

?? 「僕にはもう帰る場所なんてない」

?? シヤムの言葉に二人はドキツとした。

?? 「……でも、しばらくはここにいなければならないみたい。…

…それじゃ、沙英さん、さようなら」

?? 驚いた二人に気付かず、シヤムは一人で呟くように言った。踵を返し、シヤムは人混みに紛れてどこかへ行こうとする。

?? 「あ、待つて……！」

?? 沙英が勇気を振り絞って声を上げるが、彼は止まらなかった。

?? 「……なにあいつ！ ？本当に沙英を助けた恩人！？」

?? 「うん、そうだよ。覚えてる」

?? 沙英の思い描く彼と寸違わない容姿だったが、その性格は想像していたよりもはるかに違った。沙英はこっちが勝手に想像していただけだから仕方ないと思っていたが、友は違った。

?? 「それにしても、想像してたのとぜんっぜん違うわね。もっと優しい奴かと思つてた」

?? 「……優しい人だよ、きつと」

?? 優しくなければ、単身乗りこんで自分を助けたりはしないはずだ。

?? 沙英はそんな推測をする。

?? 「ほんとにそう？ ？相手のこと考えずまくし立てる奴にしか見えなかつたけど」

?? 「……優しいから、私の事を思ってくれてるんだよ」

?? 「やれやれ。物好きね、あんた」

?? 「友だつて、私なんかにかまうなんて、物好きだよ」

?? 「……沙英と話せるんなら、物好きも悪くはないかな」

?? ケラケラと友は快活に笑う。その言葉がどれほど沙英の救いになつているのかも気付かずに。

?? 「さ、ゲーセン行こ、ゲーセン！」

?? 「う、うん！」

?? 笑顔で沙英を連れ出す友につられ、いつしか沙英も頬にうつつ

ら笑みを浮かべていた。

??ゲームセンターに着いた沙英と友だったが、ゲームにとりかかることはできなかった。

??「……刑部さん、桜田さん」

??ゲームセンターの前に、私服姿の警察官二人がいたからである。??「おやおや、これはこれはお嬢さん方。こんな時間にこんなところで何をやっているのかな?」

??コートを羽織った刑部は、芝居がかった拳動で二人に詰め寄った。

??「あ、あんたら、なんでここ……!」

??「あんたら? ?口の利き方に気を付けな。私達はこういうもんだよ」

??「ずい、と友に歩みよった桜田が、警察手帳を見せた。

??「あ、あ、なんのご用でしょう?」

??「なんのご用? ?わからないはずないよね、お嬢さん? ?こんな時間に、こんなところで……。ま、とりあえずついてきて。

ご両親とお話させてもらわないと……。ね?」

??警官は補導する、と言っているのだ。親に連絡されるとわかって友は青ざめたが、沙英は疑問に思った。この二人は沙英に両親がいないことを知っている。それなのにどうして沙英を見ながらそんなことを言うのか。よく考えれば、なぜわざわざ警察手帳を見せたのか。

??「さ、おいで、お嬢さん」

「ちよ、ふざけないで……!」

「いいから、ね?」

??そういえば今日一度も名前呼んで貰ってないな。近くの交番に連れられながら、沙英はそう思った。

第八話

?? 近くの交番まで連れられる道中、友は気が気でなかった。

?? 「で、お嬢さん達はどうしてこんな時間にゲーセンなんて行くうとしていたのかな？」

?? 「……それは」

?? 二人の警官はさつきからこれ見よがしに沙英に訊き続けている。まるで、初対面であるかのように他人行儀に。

?? 「ちよ、ちよつと、あんたたち」

?? 「口の利き方気を付けろ、って言わなかったかしら？」

?? 有無を言わせぬ言い方だった。その勢いに気圧され、友はおし黙った。その様子を隣で見っていた沙英は、さつきまで朗らかだった桜田が凄んだことに内心驚いた。

?? 「ずいぶん他人事みたいに眺めるんだね」

?? 「え？ ……いえ、そんなわけじゃなくて」

?? 「ま、いいけど。さ、ついたよ。奥に入って」

?? 交番まで着くと、刑部は奥の部屋に二人を案内する。

?? 「え？ な、なんで」

?? 「いいから」

?? 戸惑う友と沙英の背中を桜田が押す。

?? 「ま、とりあえず座って」

?? 刑部が勧めたのは畳の上。ここは詰めている警官達の休憩場所で、一般人を入れることはないところである。

?? 「はい」

?? 沙英は素直に、友は訝しげに畳の上に座る。

?? 「まったく、日割さん。少しは自分の立場、というものをわかってもらいたいわね」

?? さつきとはうってかわって親しげになった口調で桜田は言う。

内容は少しとげとげしいが、それでもさつきまでの他人行儀なもの

とは違った温かみがある。

??「……沙英の立場って、何？　沙英は普通の女の子だよ？」

??むすつとした様子で友は言った。

??「残念だけど、日割さんが普通の女の子だったのは、一週間前までのことよ」

??「……でも」

??沙英は思わず、否定の言葉を口にしようとする。

??「普通でいたいのは、わかります。けれど、巻き込まれてしまったものはどうしようもないんですよ。お気の毒とは、思いますが」
??それを牽制するように刑部が先に言った。

??「……」

??寂しそうに沙英は黙り、それきり何も言おうとしなかった。

??「それで、どうして私達をここに連れてきたの？」

??「口の利き方を付けるって言ってるでしょうに……。まあ、私が言いたいのはね、あんまりうるつかないで、ってこと」

??「でも」

??「お友達を外に連れ出して気分転換させてあげたいのはわかるけど、今はダメよ」

??「どうして！」

??「……言えないわ」

??「肝心なところを知らされず、友は歯噛みする。

??「なんで！？　沙英の自由を縛るんだったら、その理由も教えてよ！」

??「教えられないの。学校サボってたことは黙っててあげるから早く家に帰りなさい」

??桜田の口調に棘はなく、むしろ本気で気遣っているようだった。友にはそれが腹立たしく感じた。

??「なんで理由も知らされずにそんなこと言われなきゃいけないのよ！」

??「本当にお父さん達呼んであげましょうか？　理由は十分に

あるのよ？　？それをしないのは、単に私の善意。……さ、どうするの？」

??「友ではなく、黙りこくっている沙英に向けて彼女は訊いた。

??「……私、帰ります」

??「沙英!？」

??「あなたは正しい判断をしましたね。さ、送って差し上げましょう。まだ明るいとはいえ、危険がないとは限りませんから」

??「……はい」

??「危険がないとは限りませんから。沙英にはその部分にこそ、自分達を家に帰そうとする理由の全てが隠されているようにしか思えなかった。

??「……沙英がいうなら、私も帰るけど」

??「ま、家の中で遊ぶんなら、私達も止めないけど。で、お友達はどうする？　？おうちに帰る？」

??「……沙英、家に行ってもいい？」

??「沙英は頷く。というか断るわけがなかった。

??「そういうことなんで」

??「そう。じゃ、刑部さん、車出してください」

??「わかつてますよ、桜田さん」

??「刑部は快く頷くと、交番を出て、近くの駐車場に向かった。

??「ねえ、日割さん」

??「なんですか？」

??「沙英ちゃん、って呼んでいい？」

??「……べ、別に構いませんが」

??「急に訊かれて戸惑いながらも、沙英は了承した。

??「そう、よかつたわ！　？あなたも私の事を桂香さん、って呼んでね。もちろんお友達もよ？」

??「……友」

??「友ちゃん、ね？」

??「そうよ」

??ぶつきらぼうに友は答えた。

??「沙英ちゃん、友ちゃん、一つだけ、言いたいことがあるの」
??「……なに？」

??「なんですか？」

??「いい？ 絶対に、無理しちゃダメよ？」

??「刑部がいたときは全く違った態度で、桜田は言う。」

??「無理してなんか……」

??「無理してなかったら、そんなに緊張しないよ」

??「そんな、私は……」

??「言われて、沙英は自分の体を確かめる。」

??「……どう、沙英？」

??「……」

??「確かに、四肢が緊張でガチガチになっていた。」

??「ほら、ね？」

??「私は、そんな、確かに、外に出たい、って思ったのに……」

??「そりゃ思ったでしょうけど、それでも我慢しないと。あなたの本能は外が危険な場所だって感じてるのに、外に出るからよ」

??「……そんな。友がいるのに」

??「友がいたのに自分が外界に対して警戒していたことが、沙英には信じられないようだ。」

??「ま、精神面では友ちゃんがいたから助かってるみたいね。でも、そればかりは傷が癒えるまで待つしかないわ」

??「そう、ですか。どれくらい、待てばいいんですか？」

??「うーん、そうねえ。外が怖い、って思わなくなったら、かしら」

??「……」

??「本当にそんな日が来るのか、沙英にはわからなかった。」

??「……私の、せいだね。ごめん、沙英」

??「友ちゃんも、自分を責めちゃダメ。時々こうして連れ出してあげようとするのも、重要なんだから。ホントに連れ出すのは避け

てほしいけど」

?? 珍しく桜田が友をかばうように言った。

?? 「……ありがとうございます」

?? そして、友も珍しく桜田に敬語を使った。

?? 「……お、来たみたい。じゃ、ついてきて。車の中は安全だから」

?? 車の排気音が聞こえると、桜田は立ち上がり、友と沙英を連れ出す。交番の外には、ごく普通の乗用車がエンジンをかけた状態で停めたあつた。

?? 「送っていきますよ、お嬢さん」

?? 運転席から顔を出し、芝居がかった挙動で刑部は言った。

?? 「さ、二人とも早く乗って！」

?? 外に出た途端、桜田は冷たくあたる。急な態度の変化に二人はついていけず、戸惑うばかり。

?? 恐々と車に乗り込むと、桜田は乱雑に扉を閉めた。

?? 「出して」

?? 「人使い荒いですね」

?? 「黙って出す！」

?? 「はいはい」

?? 桜田の怒声に肩をすくめて、刑部は車を発進させる。

?? 「……やっぱり、なにかいるわね」

?? 桜田の呟きは小さく、誰の耳に入ることもなかった。

第九話

?? 車内はなんとも言えない沈黙に包まれていた。誰も、会話の糸口をつかむことができない。

?? 「……桜田さん、そろそろいいのではないのでしょうか？」

?? おもむろに、刑部が口を開いた。

?? 「……でも、まだ」

?? 「気持ちばかりです、桜田さん。けれど、これも職務です」

?? 優しい刑部にしては強い口調で言い切る。

?? 「……わかったわ」

?? 神妙に頷くと、桜田は胸ポケットから、一枚の写真を取り出し、隣に座る二人に見せた。

?? 「……！」

?? 二人は動揺を隠す間もなかった。

?? 「……あなたたち、この子を知ってる？　？って訊きたかったんだけど……訊くまでもなかったみたいね」

?? 写真には、一人の少年が写っていた。視線はあさつての方向を向いていて、隠し撮りされたものだということがわかる。

?? 「こ、こ、この人が、何か……？」

?? 写真の少年は、先ほど沙英達が会っていた人間……シヤムだった。

?? 「この子が誰か、知ってる？」

?? 沙英は首を振る。

?? 「しゃ、シヤム、っていう名前しか……」

?? 「……そうなの。この子は嘉蓋 紗武といって……」

?? 「え？」

?? 嘉蓋？　？沙英は心の中で繰り返す。どうして犯人さんの名前が、こんなところで出てくるの？　？沙英は恩人と犯人の苗字が同じであるということ繋げることができなかった。いや、したくな

かったのだ。

?? 「知り合い？」

?? 「い、いえ。そ、それより、一体どうして、犯人さ……犯人の名前が出てくるんですか？」

?? 話をそらすつもりで、沙英は訊く。

?? 「……」。彼は今指名手配中の連続殺人犯、嘉蓋　？ 栄の息子なの

?? 「……え？　？う、うそ……」

?? もう一度、彼女は聞き返した。信じられない、とでもいうように首を振る。

?? 「……それで？　？桜田さん、なんでシヤムのこと探してるの？」

?? 固まっている沙英に代わり、友が訊いた。

?? 「……あまり、事件に巻き込まれたあなたがいる前で言いたくないんだけど……」

?? 「犯人がこの付近に潜伏している可能性があります」

?? 桜田が躊躇っていると、刑部が横から信じられないような事実を二人に伝えた。

?? 今度こそ、沙英は凍りついた。

目に光がなくなり、どこか虚ろになる。

?? 「……沙英、沙英？」

?? 友が揺さぶるが、沙英はまるで反応しない。まるで人形にでもなったようだ。声も届いていないかもしれない。

?? 「……友さん、この際だから言っておくわ。嘉蓋被疑者は、再び沙英さんを狙っているかもしれないの」

?? 「そんな……」

?? 友は沙英を揺さぶる手を止めて、桜田がいる助手席を見る。

?? 「沙英さんから何か聞いてない？　？見張られてるとか、つけられてるとか」

?? 「そういうのは……聞いていません」

?? 「そう……」

?? 少し安心したように、桜田は言った。

?? 「本人が気付いていないだけですから、桜田さん、油断しないように」

?? 「……はい」

?? 胸を撫で下ろした桜田に、刑部が釘を刺す。

?? 「……お嬢さん、あなたもゆめゆめ油断しないように」

?? 「わかりました」

?? 友は念を押すような刑部の忠告に素直に頷く。

?? 「……あの人が、この近くに？」

?? 会話が途切れた頃、沙英が茫然自失のまま呟いた。

?? 「沙英、大丈夫？」

?? 「……友」

?? 沙英はゆっくりと友の方を向き、不安そうな友の姿を見つけると、おもむろに抱きついた。

?? 「さ、沙英」

?? 「……怖いよ、友」

?? 沙英の声は震えていた。

?? 「私の思い込みかもしれないけど、怖いよ。また攫われるんじゃないかって、思っちゃうよ。助けて、友……」

?? 「さ、沙英……」

?? 友はそれ以上何も言えなかった。沙英を助ける方法が、少しも思い浮かばなかったのだ。

?? 助けると豪語しておきながら、親友のために何もしてやれない自分を、友は呪った。

?? 「……沙英さん、着きましたよ」

?? 何を言うべきか友が迷っていると、車の振動が止まった。窓の外を見ると、もう見慣れた沙英の家があった。

?? 「……さ、行こ、沙英」

?? 友は車のドアを開け、沙英を促す。

??「……帰りたくない」

??しかし、沙英は友に抱きついたまま離れようとしない。

??「そんなこと言われても……」

??「友の家に行きたい。今、家に帰りたくない。怖い」

??ぎゅう、と友に抱きつく力が強くなった。それでも、友には簡単にふりほどけるのだが、彼女はそれをしない。

??「……刑部さん」

??「はいはい。お嬢さんの家ですね。わかりましたよ」

??刑部は得心したふうに頷くと、再びエンジンをかけた。

??「えつと、私の家は……」

??「知っていますから、大丈夫ですよ」

??「……はい？」

??友は思わず聞き返した。友は刑部に自宅を教えていない。それなのに、刑部は知っていると云った。

??「諸事情あるのですよ」

??沙英を攫った犯人が、沙英の関係者である可能性を考慮し、友の家を調べたのだが……それを刑部と桜田が伝えるわけがなかった。

??「……」

??訝しげな表情をしたまま、友は震える沙英を抱きしめ続けた。

??

??

閑二話

??「……疲れた」

??沙英と友を送り届けたあとの車内。桜田はため息をついて言った。

??ここは刑部がこの車を停めるため借りた駐車場。二人は沙英と友を送り届けると、ここに来て二人で話をするにしてみたのだ。誰にも聞かれたくない話をするには、ひと気のない場所で、なおかつ車内であるのが好ましい。

??ここに来る前、桜田達が友の家に着くと、沙英は特に抵抗もせず車から降りた。またこねるのではと心配をしていた桜田は安心したのだが……。

??「それには同意です。……にしても、まさかあれほどとは」

??運転席に座る刑部は、気の毒そうに顔をしかめた。

??「……傷は私達が想像していたよりも、深かったみたいね」

??攫われて三日間、なにもされずに生還した奇跡の少女。普段から凶悪事件に心を痛ませている警察署内では、かなり話題になった。……しかし。

??「まさか半乖離状態になるとは、思いませんでしたね」

??「まったくよ。さすがに思慮に欠けてたわね」

??しかし、その奇跡の少女がいまだに傷を抱えているということを知っているのは、桜田と刑部、この二人しかない。それもそのはず、事件後沙英に出会った警察関係者は、この二人だけだからだ。

??「友というお友達も、心配ですね」

??「ええ。沙英ちゃんが依存しないといいんだけど……」

??二人は沙英と友にある信頼関係を微笑ましく思う反面、それが強くなりすぎて依存しあう関係にならないか懸念している。

??「……私情はここまでですね」

??「……だね」

??二人がそう言うと、ピリピリとした雰囲気車が車内に漂い始める。
??「被害者は今のところ何人ですか？」
??「現在、二人確認されているわ」
??桜田は鞆から何枚かの資料を取り出した。グリップでまとめられ、写真も何枚か挟まれている。
??「被害者の写真、見せてもらいます」
??「どうぞ」
??桜田は言われた通り、資料を刑部に手渡した。彼は資料をパラパラとめくり、一枚の写真に目を止めた。
??「……これは」
??「そうよ。これだけは何があってもあの子に知らせるわけにはいかないわ」
??「同意です。上が本気で情報統制を敷いている理由は、これですか？」
??写真に写っているのは惨殺された少女の姿だった。服を剥かれ、全身にこれでもかというほど深い傷を刻み込まれている。彼女の苦悶の表情にゆがんだ顔は、その苦痛がいかに激しかったかを物語っている。
??「それだけじゃないけど……さすがに、この事件はお茶の間には流せないでしょう、ってことらしいわ。……いつかは、ニュースになるでしょうけど」
??「……しかし、奴の執念がこれほどとは。沙英さんの護衛、なんとかなりませんか？」
??「だめよ。明確な証拠がないと」
??そして、写真の少女は沙英そっくりであった。体格も似通っていて、聞き込みをした限り性格も沙英と同じように明るく快活だった。
??「……これだけで、立証になりませんか？」
??「この犯人が嘉蓋であるという確証がない以上……無理よ」
??「……そうですか」

?? 刑部は再び資料をめくりはじめる。

?? 「……沙英さんには何の関係もない少女ですね。つまり、ただの身代わり……ですか」

?? 「そうみたいね」

?? 資料を一通り読み終わると、刑部はそれを桜田に返した。

?? 「どうも。……犯人はやはり」

?? 「嘉蓋……でしょうね。証拠はないけど。……居場所さえ掴めれば……」

?? 神出鬼没の殺人鬼、嘉蓋。？栄。彼が最初の殺人を犯したのは十年前。殺害方法は筆舌にしがたいほど残酷で、動機もなかった。

すぐに被疑者に挙げられたが、今まで捕らえられることはなかった。なぜなら、彼は住所不特定で、常にあちらこちらへと移動を繰り返していたのだ。指名手配もされたが、わずかな情報しか入ってこず、今の今まででがかりさえ、掴めなかった。

?? 「もし掴めても、沙英ちゃんの時みたいにまた逃げられる可能性もあります」

?? 「……わかってる」

?? 嘉蓋を捕まえるチャンスは、十年間通して沙英の事件のみであった。犯罪史上に残るほどの猟奇殺人鬼を捕らえるチャンスを作った……そういう意味でも、沙英は『奇跡の少女』だった。

?? 「……沙英ちゃん、大丈夫かな」

?? 「それは私にはわかりません。嘉蓋を捕まえたとしても……彼女の傷が癒えるとは言えません」

?? 刑部は厳しい顔で言った。

?? 「……わかってる。それぐらい、わかってる」

?? 「なら、いいのです。では捜査に向かいますようか桜田巡查長」

?? 「……了解しました刑部警部」

?? 刑部は桜田の返事に頷くと、エンジンをかけ、アクセルを踏んだ。

?? 「これからは本格的に仕事です。わかりましたか？」

?? 「はい、刑部警部。ところで、どこを捜査するのですか？」
?? 「事件のあった現場と、それから沙英さんが捕らえられていた家です」

?? 「……わかりました」

?? 刑部と桜田。この二人は警察署内でも一二を争う問題児であった。

?? 上司に敬語を使わない巡査長、桜田 ? 桂香。

?? 桜田が敬語を使わなくなった原因でもあり、誰にでも敬語を使う警部、刑部 ? 敬二。桜田が新任してきた頃より常にパートナーとして一緒に行動しており、そのせいで桜田は刑部の影響を色濃く受けている。

? 刑部曰く、仕事以外の時は敬語を使うな。曰く、自分より偉そうに振る舞え。曰く、常に市民のためにあれ。

?? それらを忠実に守っているからこそ桜田は今も刑部の隣にいたのであり、そのせいで彼女は刑部以外の下につけなくなってしまった。

?? 「……ラジオでも、つけますか？」

?? 「あ、お願いします」

?? 部下を自分色に染めたり、一人の部下とずっと一緒に仕事をしたり……こんな自由が許されるのも、刑部がさる人間と懇意であるからにほかならない。桜田が捜査の時以外は敬語を使わなくてもいいのも、刑部が多少無茶をしてもクビにならないのも、全てはそのおかげである。

?? 『……お昼のニュースをお伝えます。――県――市で、十七歳の少女が遺体になって発見されました。警察はこの件についてはここ最近起こっている連続誘拐殺人の犯人と同一であると発表しました。この事件は同県に住む同じ十七歳の少女が無傷で生還したことで――』

?? 「なっ……っ!？」

?? 刑部は思わずラジオを消してしまった。

?? 「お、刑部警部、これ、もしかして……」

?? 「あ、ああ、そうです。我々が今から捜査する事件です！ ?

……なぜ、このことがマスコミに……」

?? 刑部はアクセルを踏みながら、憤るしかできなかった。何かしなければならぬのはわかってはいるのだが、何をすればいいのかわからない。今は少しでも情報を得ようと、一度は消したラジオを再びつける。

?? 『……ここに、テープがあります。……その、犯人を名乗る人物から送り届けられたものです』

?? 二人はまた絶句した。

?? 「お、刑部さん！？ ?か、彼ら正気ですかっ！？ ?」

?? 「そんなの私を知るはずないでしょう！？ ? 早くラジオ……いえ、テレビ局にいかなければ！ ? 影響力はテレビの方が強いですから！」

?? 刑部は思い切りアクセルを踏み込んだ。車の上部に設置された回転灯を灯火、サイレンを鳴らす。ごく普通の乗用車に見えて、その実は覆面パトカーだったのだ。

?? 「急ぎましょう！」

?? 「で、でも、上にはなんて……」

?? 「証拠品の押収！ ? それで話が付きます！」

?? 「でも」

?? 「犯人がもし沙英さんの殺害予告を名指ししたらどうなると思ってるんですかっ！？ ? そうじゃなくても、被害者の悲鳴が録音されている可能性もあるんですよっ！ ?」

?? しぶろうとする桜田を、刑部が怒鳴って黙らせる。

?? 「始末書が怖いなら全て私のせいになさい！ ? 私が全ての責任を追いましょう！ ? だから、黙ってついてきてください！」

?? 「……はい」

?? っっそうアクセルペダルを強く踏み、二人を乗せたパトカーはテレビ局への道を爆走する。

第十話

??「ただいま」

??友はふるえる沙英を抱きしめたまま、自宅の扉を開けた。どこにでもある日本家屋だが、日本で唯一沙英が安心できる場所であった。

??「おかえり。ずいぶん早いわね、どうかしたの？」

??友はすぐに答えることができなかった。友の両親は彼女が学校に行っているものだと思っていたのだから。今更になって、友は学校をさぼったことを……正確にいうなら、サボることを両親に知らせなかったことを後悔していた。事情を説明し、説得したのなら沙英を外に連れ出す事を許可してくれたかもしれないのに、友はそれをしなかった。たとえ表向きは沙英のためであっても、サボることには変わらないのだ。後ろめたい気持ちがあったわけではない。それが、友に事情を説明することをためらわせ、結果的に両親を裏切る形になってしまった。

??「……返事が遅いわね。まさかさぼりかしら？」

??リビングから友の母親が顔を出した。適度にシワのよった、一児の母親らしい顔立ちの女性だ。娘が学校をサボったかもしれない、と思っただけでも温厚そうな表情を崩さない。

??「……沙英ちゃん」

??しかし、その表情は友にしがみつくように抱きつき、うつむいている沙英を見ると引き締められた。

??「お、お母さん、お願い、沙英は悪くないの、だから、もう少しだけ怒るのを待って！」

??何が沙英の中にある傷を抉るかわからない今、ただサボりを怒られることさえ、気をつけなければいけない。そう思って友は懇願した。

??「友、落ち着いて。あなたが取り乱してはいけないわ。そうで

しよう?」

??友の母、大臣　?慈亜はゆつくりとした足取りで友と沙英に近づく。

??「で、でも」

??「私は行為を責めないわ。人間、何をしたかではなく、何を思つて行動したか、でしょう?」

??そつと友と沙英の肩に触れ、そのまま抱きしめた。

??「お、お母さん……」

??気恥ずかしくて、友は顔を赤くする。人の温もりが増えて、沙英は少し安心する。

??「たとえ美しいと見られる行為をしたとしても、その時の心が美しくなければ、意味はないわ。たとえ人を救おうと、それが打算に満ち溢れていては美しくはないし、褒められたことではない……
そう思うでしょ?」

??「うん、私もそう思う」

??「……そう」

??この時、慈亜は娘を試していた。もしここで娘が後ろめたそうにしたのなら、慈亜は娘に釘を刺すつもりだった。もちろん彼女は自分の娘を信じているし、先の質問も便宜的なものでしかない。

??正直なところで言えば慈亜は人助けなら打算があっても構わないと思うし、少しの打算もなしでは人助けなど出来ないとも思っている。それでも彼女は、自分の娘だけは打算抜きで人助けがてきるような、優しい子になってほしかった。親のエゴだということも重々承知で、友を優しい子になるよう育ててきた。

??「……とりあえず、友も沙英ちゃんも、上がりなさいな。こんなところで温めあつていても、なんにもならないでしょう?」

??くすりと微笑んで、慈亜は二人をリビングへと上げる。

??「靴、脱ぎ忘れないでね」

??「あ、うん。……沙英、靴脱いで」

??「……うん」

?? 沙英は言われるまま、靴を脱いで家に上がった。

?? 「おじゃまします……」

?? 「いらっしやい。さ、怒らないから、安心して座って」

?? リビングまで来ると、慈亜がお茶を用意して、友と沙英に席を進めた。背の低いテーブルに座布団が二人分置いてある。その向かい側には、慈愛の表情を浮かべながら慈亜が座っている。

?? 「うん、ありがとう、お母さん」

?? 「……どうも……ありがとうございます」

?? 二人は彼女にお礼を言うと、正座で座った。

?? 「気にしないで。……それで、どうしたのかしら？ ……こんな時間に」

?? 慈亜はすつと目を細めて、友を見た。

?? 「え、あの、その、じ、実は……」

?? 友はとたんに慌てて、言い訳をするように事情を説明し始めた。

?? 「……そういうことね」

?? 慈亜は一通り話を聞くと、カップを傾け、お茶をすすった。

?? 「……お母さん、その、沙英のことなんだけど」

?? 「沙英ちゃんはどつするの？ ……泊まっっていくの？ ……それも、夜は帰る？」

?? 「……わ、私は」

?? きゅつと、沙英は膝の上に置いた両手を固く握りしめた。安心したのか、もう友を抱きしめようとはしなかった。

?? 「私は……夜、帰ります」

?? 「別にいいのよ、泊まっても」

?? 「……で、でも」

?? 「不安？」

?? 「……はい」

?? 沙英は素直に頷いた。

?? 「迷惑だと……思います。私は、きつと、狙われてるかも、し

れないから」

?? 先ほど、二人の警官が言っていたことを、沙英は思い出す。蓋が未だに自分を狙っていると知らされて……しばらくいきが飛んで、それから回復した彼女が真っ先に心配したのは、友の身だった。自分が狙われているなら、友と一緒に狙われてしまうかもしれない。そんな懸念がどうしても拭いきれなかった。

?? 「狙われているから、一人でいたい? ……うちの娘と一緒に狙われないか、不安なの?」
?? ゆっくりと沙英は頷いた。

?? 「……そう。わかったわ。じゃあ、寝るときだけ、自分の家におかえりなさい」

?? 「はい」

?? 「ちよ、ちよつとお母さんっ!?!」

?? あつさりと決断した慈亜に、友は思わず抗議した。

?? 「なにかしら?」

?? 「と、泊めてあげようよっ! ? 狙われているのに一人で寝るなんて危険すぎるよ!」

?? それを聞いて、慈亜は驚きに目を見開いた。

?? 「……沙英ちゃん、一人なの?」

?? 慈亜は両親がいないことを今まで知らなかった。それは沙英が隠していたからに他ならないが……今、沙英はそれを隠そうとはしなかった。

?? 「はい。……でも、そっちのほうが好きです」

?? もし誰かに押しいられても、攫われるのも乱暴されるのも殺されるのも、全部一人で済む。誰かが一緒に被害に遭うよりは、そっちの方がはるかにいい。沙英はそう思っている。

?? 「……そうなの。でもね、私は一人でいるよりは多くの人がかたまっていたほうが安全だと思うのよ」

?? 「……」

?? 「だから、泊まっていきなさいな。私も、ここで帰してあなた

の身に何かあったら寝覚めが悪いわ。私達を助けると思つて、ね？」
「……………」

「沙英は慈愛の提案にすぐ賛成することができなかった。理屈では、一人よりは安全であることなどわかっている。けれど、不安は拭えない。むしろ、恐怖は増すばかりである。」

「もし、自分がここに泊まったせいで、友や、友の家族に被害が出たら……………」。

「そう思う傍で、人恋しい自分がいることも沙英は否定しなかった。昨日友と一緒に眠つて、いつものように夢を見た。けれど、すぐに安心できたのだ。あれが夢だったと。友となら、いくらでも一緒に眠りたい。そう思っていた。」

「……………強情ねえ。ほら、友からも何か言つてあげて」

「母親に急に話を振られ、戸惑いながらも友は口を開いた。」

「ね、ねえ、沙英。一緒に泊まるうよ。昨日は泊めてもらったから、今日は泊まつていつて。私は沙英と一緒に寝たいな、沙英はどう？」

「ストレートな言葉に、沙英は心動かされた。」

「……………私も、友と一緒にいい……………」

「おずおずと、消え入りそうな声で、しかし確実に沙英は言った。それはよかつたわ！　？そうと決まれば、さ、ゆっくりしていつてね。……………テレビでも見る？」

「……………え」

「慈亜はそばにあったテレビのリモコンを持つと、電源を入れた。」

「……………っ！　？お、お母さんっ！」

「……………そんな」

「慈亜がテレビの電源を入れるのと、二人の問題警察官が覆面パトカーのラジオをつけたのはほぼ同時だった。」

第十一話

??』……お昼のニュースをお伝えします。——県——市で、十七歳の少女が遺体になって発見されました。警察はこの件については、ここ最近起こっている連続誘拐殺人の犯人と同一であると発表しました。この事件は同県に住む同じ十七歳の少女が無傷で生還したことで

??ブツッ。

??「……沙英、だ、大丈夫……？」

??友は心配そうに、リモコンをテレビに向けて肩を上下させている沙英に聞いた。

??「はあ、はあ、はあ、はあ……」

??沙英は荒れている呼吸を必死に抑えようとすることに必死で、友の言葉が聞こえなかったようだ。彼女はニュースが流れたと同時に嫌な汗が流れてきて、気がついたら友の母親からリモコンをひったくっていた。

??「どうしたの、沙英ちゃん？」

??「……っ。ごめんなさい、おばさん……」

??ようやく心配する二人の姿に気が付き、沙英は慌ててリモコンを返した。

??「……ニュースは、やめとく？」

??「……いえ。大丈夫、です」

??本当は全然大丈夫ではなかった。また、車の時と同じように頭の中が真っ白になった。それでも、沙英は友の母親に変に思われたくない一心で、強がった。

??「そう。なら、続きつけるけど、いいかしら？」

??「……はい」

??「沙英、あんまり無茶は……」

??「いいの、友」

?? 沙英は心が弾けそうになるのを無視し、無理矢理微笑んだ。

?? 「私は、普通の女の子。……そうでしょ？」

?? 「……………」

?? 友は何も言えなくなった。あれだけ普通であろうとした沙英に、警察官と同じようなことを言うわけにはいかない。けれど、言わなければ何か大変なことになりそうな予感がする。彼女は二つの思いの間で揺れ、ついに答えが出せなかった。

?? 「…………… やっぱり、やめておこうかしら。辛そうだし、ね？」

?? 「…………… つ、だ、ダメです。私は、普通なんです。たかがニューズぐらい、どうってことありませんッ！」

?? 沙英は普通でありたかった。つい最近までは何も問題なくニュースだっただけに見れていた。それなのに、事件が終わってから、それができなくなった。それが沙英には許せなかった。まるで、事件が自分の人生全てを支配しているような感覚に襲われ、不安になるのだ。沙英は普通に帰りたいたいし、戻らなければならないと思っていた。その思いに囚われていると言ってもいい。普通でなければもう自分はまともな人生を歩めない……そんな強迫観念に、沙英は縛られていた。

?? だから、沙英は慈亜の手からリモコンを選び、テレビの電源をつけた。ブラウン管に一瞬で電気が通じ、飛ばされていた電波を受信し、情報を三人に伝える。

?? 『……………ここに、テープがあります。……その、犯人を名乗る人物から送り届けられたものです』

?? ピクリ。沙英はもちろん、沙英も慈亜も動きを止めた。

?? 『……………では、お聞きください』

?? ニュースキャスターが引きつった表情で言った。それと同時に、カチリと音がしたあと、テープを流す時の独特のノイズが流れる。

?? 『…こんにちは、お茶の間の諸君』

?? その声は変声機で変えられたのか、不自然に低くなったり高くなったりを繰り返していた。

?? 『さて、今日は犯行声明を出そうかと思っている。……ふふふ、日割 ? 沙英。待っていてね、すぐ、遊んであげるから』
?? カチャリ、と大きな音がすると、次に風の音がした。録音機を持ち上げ、移動しているのだろう。

?? 『……こんな風に』

?? 『そう犯人が言うのと、次の瞬間。』

?? 『少女の絹を裂くような悲鳴が、全国区に流れた。』

?? 『うるさいなあ』

?? 『回転する機械が駆動する時の甲高い音がしたあと、大量の水が噴き出した時の音がして、少女の悲鳴が一層強くなった。』

?? 『ゆ、ゆるし、許して、許してください……。も、もう、や、やめてください……。なんでも、しますから』

?? 『だゝめ』

?? 『少女の必死な命乞いを軽く蹴った。』

?? 『全国の諸君、これはなんででしょう?』

?? 『機械が金切り声をあげるように唸る音。』

?? 『や、やめて、やめ、おねが、なんでも、なんでもしますから』

?? 『答えはチエーンソーでしたっ!』

?? 『例えようもないほど悲痛に満ちた断末魔が流れ……。あらゆる音が一度途切れる。けれど、ノイズはまだ止まらない。』

?? 『沙英ちゃん、待っててね。すぐに遊びに行くから』

?? 『今度こそ、ノイズも含めて全ての音が切れた。』

?? 『……』

?? 『終わったにも関わらず、ニュースキャスターは何も言わない。』

?? 『このニュースを見ているであろう全ての視聴者と同じ様に、目を見開き、絶句していた。』

?? 『……おい、おい! ? 貴様ら何流してる! ? 捜査攪乱だぞ』

!』

?? 『え、あ?』

?? 『男の低い怒鳴り声が出たかと思うとー』

?? 『しばらくお待ちください』

?? 予定調和のように、暗転した画面一杯にその文字が浮かんだ。
?? 「……さ、沙英」

?? 友は慌てて、沙英からリモコンを奪い、テレビを切った。

?? 奪われた当の沙英は、完全に無反応だった。目は普段と変わらないが、その瞳は完全に光を失い、どこも見ていない。意識があるのかさえ、不明である。

?? 「……沙英ちゃん？」

?? 慈亜が沙英の前で手を振っても、全くの無反応。

?? 「……とりあえず、寝かせてあげましょうか」

?? 慈亜の提案に、友は頷いた。

?? 「友はお布団の準備をしてくれるかしら？」

?? 慈亜は沙英をお姫様にするように抱き上げた。

?? 「……すごい力持ち」

?? 「この子が軽すぎるのよ。あなたの半分ぐらいじゃないかしら？」

?? 「……二十キロ？」

?? 「親にサバ読んでどうすんのよ。この子、大体二十五キロ後半強、つてところかしら？」

?? 「私そんなに体重ないよっ！」

?? 頬を膨らませた友に、慈亜は微笑んだ。

?? 「わかつてるわよ、それくらい。この子も多分四十キロあるかないか……とにかく、痩せすぎよ。ずっと不安だったんでしょね。あなたが、ううん、私たちが笑って、気持ちを引き上げてあげないと……」

?? 優しい顔を沙英に向ける慈亜。笑顔を向けられても、沙英は何も反応せず、ただ虚ろな瞳でどこでもないどこかを見つめるだけだった。

?? 「……大丈夫かな、沙英」

?? 友は慈亜に聞いた。あまりに沙英の様子が変わったので、不安

なのだろう。

??「……わからないわ。ずっとこのままお人形さん状態、かもしれないし」

??お人形さん状態。慈亜は自分で言っただ後悔した。何で友を不安にさせるようなことを。

??「ほら、ついた。友、お布団よろしく」

??「……うん」

??友は客室の扉を開けると、中のベッドを綺麗に整える。

??「できた」

??「これくらい綺麗なら沙英ちゃん安心できるかもね」

??そつと沙英をベットに寝かせると、慈亜は少し表情を引き締め
た。

??「さ、友。少し話をしましょうか。リビングへ行きましょう」

??慈亜が促しても、友は動かなかつた。

??「いや！　？ここで沙英を見とく！」

??「気持ちはわかるけど、言わなきゃいけないことがあるの」

??「……でも」

??「お願い。……ね？」

??慈亜がこの場面で話があると言ったのだ。まさか世間話をしようとしていわけではないだろう。それくらいは友にもわかる。けれど、何を話そうとするのか……。それが友にはわからなかつた。

??「……沙英ちゃんのために、関係するのよ」

??それを聞いて、友は決めた。

??「……わかつた。でも、悲鳴が聞こえたらすぐに行くからね、いい？」

??「ぜひそうしてあげてちょうだい。さ、行きましょう」

??優しいに友の肩を抱くと、慈亜は客室から出て、リビングへと戻っていった。

第十二話

??リビングのソファに隣り合って座りながら、友と慈亜は話していた。

??「……ねえ、やっぱり、沙英を泊めるの、ダメ……なのかな」

??不安そうに友は聞いた。自分はちゃんと沙英のことをわかっている。けれど、お母さんはそうではない。……だから、泊めてはダメと言われるかもしれない。そんな疑念が消えなかった。

??「どうしてそう思うのかしら」

??慈亜は友の気持ちをわかっていながら、友に聞いた。

??「……私は、沙英のことわかり始めてる。でも、お母さんはそうじゃないから、きつと……」

??「……確かに、あなたは沙英ちゃんのことを理解し始めてるんでしょうね。でも、それとは反対に私のことを……家族から、離れていっちゃってるわ」

??怒るでもなく叱るでもなく、ただそうであることを指摘するように慈亜は言う。

??「あなたが本気で助けたいと思っている相手を……ただ私が理解できないから、という理由で『ダメ』と言うと思う?」

??慈亜は沙英を変に思っているわけではない。むしろ理解している方だと自負している。だから沙英をここに住まわすことにも大賛成だし、この先ずっとここに居候すると言われたとしても、彼女は了承するつもりだった。昔から沙英と友は仲がよかつたし、よく泊りにもきていた。それが長くなるだけだと言えば、友の父親だって納得するだろう。いや、納得させてみせる。と慈亜は心の中で決意する。

??「……思わない」

??「でしょ? ?なら、なんでそんな寂しいことを言うの?」

??慈亜が言うと、友は目に見えてしょんぼりとした。

??「……だつて、その……ごめんなさい」

??「もう、しよげないの。大丈夫よ。私は気にしてないわ。……それに、きつと沙英ちゃんは戻れるわ。だから、あなたが泊まってもいい、泊まってはいけない、を考えなくてもいいのよ」

??この時ばかりは、慈亜は嘘を言っていることを後ろめたく思った。何をされたのかは知らないが、あそこまで心が折れているのに元の沙英、つまり明るく優しい沙英に戻るとは、慈亜にはとてもではないが思えなかった。

??「……そうだよ、きつと戻るよね。また、一緒に笑えるよね……」

??友は口ではそう言っているが、雲をつかむような話をしている気がしてならなかった。せめて、沙英を攫った犯人が捕まれば、少しは変わるのだろうが。他に、何かいい方法がないか、何かあるはずだ、何か……。

??「……ねえ、友」

??「え、な、なに、お母さん」

??考えることに没頭していた友は、びくりと肩を跳ねさせた。慈亜はその様子を見て、友の疲労を感じ取った。無理もない、昨日の夜から今日の今まで、友は神経を尖らせ、沙英に気を遣っていたのだ。

??「……あ、その、今日はもういいから、沙英ちゃんと一緒に眠つてらっしゃい」

??「え、い、いいの?」

??「ええ、いいのよ。あとのことは私に任せて、ぐっすりと眠ってきなさい」

??「どん、と慈亜は自信たっぷり胸を叩いた。実はここで、沙英がどうしてこんな風に気を失うようになったのか、心当たりはないか、など、他にも色々聞くつもりだったのだ。けれど、疲労が見え始めている友をさらに疲れさせるようなことを、慈亜はしたくなかった。

?? 「……ありがとう」

?? 眠つていい、と言われたからか、友は急に眠たそうに目をこすり始めた。

?? 「……ほら、こけないように気を付けて、ね?」

?? ゆっくりと友を立たせ、沙英のいる客室にエスコートする。

?? 「はい、おやすみ。疲れてるでしょうから、着の身着のままでもいいわ。でも、朝にシャワー浴びるのよ?」

?? 「うん」

?? むにやむにやと目をこすらせながら、友は沙英の隣に倒れこむようにして眠った。

?? 「……」

?? 慈亜は姉妹のように仲良く眠る二人を見て微笑んだ。

?? 「……さて、と」

?? 客室を出て、扉を閉めると、慈亜は顔を引き締めた。

?? 「……これからは、私の仕事ね」

?? 沙英を助けるためには、色々しなければならぬことがある。

それらはすべて、大人であり母親であり、そして沙英の友達でもある自分自身がしなければならぬ。

?? 「……」

?? それを決意した時の慈亜の表情は、友が沙英を助けると誓った時の表情と、驚くほど似ていた。

?? リビングのテーブルに置いてあった携帯を開くと、電話をかける。呼び出し音が数回鳴って、相手が出た。

?? 『はい』

?? 貫禄のある、低い声が出た。

?? 「あなた? ? 今時間いいかしら」

?? 『ああ、かまわないよ。今休憩中だからな。何かあったのか?』

?? 「沙英ちゃんが泊まることになったわ」

?? 電話の相手は、しばらく黙った。

?? 「もしかしたら、これから先もずっと泊り続けることになるか

もしれない」

?? 『……向こうの親は、なんて言ってるんだ。……いや、その親が信用できないからウチに来たのか』

?? 沙英の家族も、誰も信用できなくなったら連れてくる。友と彼はそういう約束をしていた。

?? 『……そのことなんだけど、どうも沙英ちゃん、ご両親がいないそうなの』

?? 『……なんだと?』

?? 電話の相手……友の父親、大臣 誠司は低くうなった。

?? 『蒸発したのかお亡くなりになったのか、そう思い込んでるのかは知らないけど……とにかく、今沙英ちゃんの家には誰もいないそうよ』

?? 『……そうか』

?? 『それと、あなた。一つ頼みごとがあるのだけど……』

?? 慈亜は少しだけ表情を引き締めた。

?? 『なんだ?』

?? 『沙英ちゃんね、ちょっと傷が深いみたい。早い内に精神科に行くかカウンセリングを受けさせないと』

?? 手に負えない。慈亜は沙英のことをそう考えていた。確かに理解している。事件の影響で周りの何もかもが敵に見えてしまうのも無理はない。できることなら早く元の明るい沙英に戻ってほしい。

しかし、だからこそ慈亜は手に負えないと考えた。友も含めて、自分たちはプロではない。そんな人間がわか知識で心に深い傷を負った沙英を治せるとはとても思えなかった。

?? 『……そうか。私はその手のことは詳しくない。お前に任せる』

?? 『ありがとう。それと、お泊りの件はいいのかしら?』

?? 『ぜひともゆつくりしていつてくれ、と伝えてくれ』

?? 『はいはい』

?? 素直じゃないな、と慈亜は思った。無理して威厳のある喋り方

をして、カッコつけて。まあ、それも可愛いんだけど。慈亜は昔を思い出していた。

??」「……ふふふ」

?? 携帯を切ったあと、慈亜一人微笑んだ。きっと、全てがうまくいく。無理やりにもそう思うことにした。

第三閑話

?? 沙英の殺害予告テープを流したテレビ局では、現在大騒ぎが起きていた。スタジオでは、人だかりができ、その中心は一人の大柄な男性だった。彼は責任者らしき人物の胸ぐらをひつつかんで、口汚く怒鳴り散らしている。

?? 「あなたたち今何をやったのかわかっているのですか！ 無辜の市民の多くと、一人の少女と、被害者の家族を恐怖と絶望に陥れたのですよ！」

?? 彼は、普段、誰にでも丁寧語で優しく話す男性警官、刑部？ 敬二だった。人だかりの外側では、珍しいことに桜田？ 桂香がオロオロと刑部の様子を見守っていた。

?? 「そ、そんなことを言われましても、うちにはうちの事情というものがありますっ」

?? 胸ぐらを掴まれているディレクターは、途切れ途切れに言い訳をした。その表情は真剣で、嘘を言っているようには見えない。

?? 「ならその事情というものを言ってみてください！ 一人の少女を恐怖に陥れ、たくさんの人々を不快にさせ、我々の手を煩わせるほどののです、よっぽどの事情なのでしょうねっ！？」

?? 刑部は凄んだが、ディレクターの表情が変わることはなかった。?? 「ええ、よっぽどの事情なんですよっ！ ？ 刑事さん、あのテープを聞いたでしょう？ ？ あの時殺されていた娘は、私の娘なのですよ！」

?? 刑部は目を見開いた。ディレクターはまだ言葉を止めない。

?? 「これを流さなければ次々と家族を殺していく……こんなこと言われて、流さないわけないでしょうがっ！ ？ 私は家族を守りたかった！ ？ でも、あの子は……彩絵花はできなかった！ ？ だから、もうこれ以上誰も死なせたくないと思うのは、普通でしょうっ！？ ？ 何も知らないあなたに、とやかく言われたくない！」

??そこまで言うと、彼の目には涙が溜まっていた。彼の様子に気
圧され、刑部は掴んでいた手を離れた。

??「……すみませんでした」

??そして、素直に頭を下げた。その態度に毒毛を抜かれたのか、
嘆息して言った。

??「……謝らないください。たしかに私は家族を守りたかった
けれど、やはり許されることではないでしょう。それぐらいは、わ
かります」

??神妙な面持ちで、彼は言う。

??彼とて、好き好んであんなテープを全国区に放映したわけでは
ない。してはいけないことだとわかっていながら、それでもせすに
はいられなかったのだ。

??愛する家族を守るために。

??「……その辺は、おそらく考慮されると思います。けれど、参
考人として、少し来てもらえますか？」

??元の口調にもどって、刑部は言った。

??テープがどこから送られて来たか、どうやって指示をされたの
か……聞くべきことはたくさんある。

??「わかりました。私で役に立てるかわかりませんが……。刑事
さん、絶対に娘の仇を捕まえてください」

??「……はい、必ず」

??静かに刑部は頷く。彼はディレクターの背中を押し、表に止め
てある車まで連れて行く。

??「……ヒヤヒヤさせないください、刑部警部。また民間人と
暴力沙汰かと思ったじゃないですか」

??車に乗り込むと、桜田は胸をなでおろした。桜田が運転席、刑
部とディレクターが後部座席に座っている。運転に慣れている刑部
が運転しないのは、もしディレクターが逃げた時のためである。

??「……なんか、またって。私は未だかつて民間人と暴力沙汰を
起こしたことはありませんよ。嘘をつかないください」

?? 胸ぐらを掴む時点でもう暴力沙汰だ、と桜田は思ったが、口には出さないでおいた。

?? 「沙英ちゃん、大丈夫でしょうか」

?? 代わりに、沙英　今は乖離状態となって寝かされている少女を想った。

?? 「………… おそらく、犯人に名指しで殺害予告をされたのですから、先ほどのように茫然自失状態でしょうね。錯乱して暴れているかもしれないですね」

?? 「…………」

?? 沙英。その名前を、ディレクターはよく覚えていた。犯人が狙う本命の標的であり、犯人から無傷で生還したこともある『奇跡の少女』。彼は勝手に気丈な少女であるように想像していたが、二人の会話を聞く限り、そうではない、どころかずいぶんと脆い少女のようだ、と思い直した。

?? 「では、桜田さん。行きましょうか」

?? 「はい、刑部さん」

?? 桜田は返事をするアクセセルを踏んだ。

?? 彼らが警察署に着いたのは、沙英が再びまとまな思考ができるようになってからだだった。

?? 「では、色々聞かせてもらいますね」

?? 「………… はい」

?? 車から降りながら、刑部はディレクターに確認を取る。

?? 「あのテープはどこから送られて来たんですか？」

?? 取り調べ室に向かいながらも、刑部は質問する。

?? 「………… コンビニから、です。名前は折笠　？ 軋識という名前でした」

?? 偽名で、しかもコンビニ。特定は不可能、か。刑部は少し落胆する。しばらくすると、取り調べ室の前に着いた。扉を開け、ディレクターに席を勧める。桜田は外で待機する。ディレクターは頷くと、パイプ椅子に座った。

??「……では、あなたはどのように指示をされたのですか？」

??「テープと一緒に紙が入っていて。そこに、『これを次のニュースで放映しろ。そうしなければ大切なものが死んでいくことになる』と書かれています」

??「その紙は、今どこに？」

??「ディレクターは一度睡を飲み込むと、決意したように、言った。??「……テレビ局に、私のデスクがあります。その引き出しの中に……あの子の、指と一緒に……」

??「そこまで言うと、ディレクターはカタカタと震え始め、頭を抱えた。刑部がその背中を優しくなでる。

??「大丈夫ですか？」

??「大丈夫なものか。なぜあの子があんな痛そうな声を上げて死なねばならなかったのだ。なぜだ、なぜ……」

??「答えの出ない疑問を、彼はいつまでもいつまでも続けた。

??「それから、一時間ほどしてからのこと。取り調べ室のすぐそばにある休憩スペースに刑部と桜田の二人はいた。

??「……コーヒー、いりますか？」

??「桜田は首を振った。刑部はそうですか、と言うとコインを自動販売機に入れ、コーヒーを買った。それを取り出すと、プルタブを開け、一気におおる。

??「豪快な飲みっぷりですね」

??「……これがお酒だったら、と割と本気で思いますよ」

??「買ってわすれか数十秒でコーヒー缶は空になった。くずかごにそれを捨てると、そばにあるベンチに座った。

??「隣、座りますか？」

??「ご遠慮します。……あの人が、どうなりましたか？」

??「あの人が、とはディレクターのことだ。

??「あれから少しすると落ち着きまして、帰らせました。特に情報も得られませんでしたね」

??「……そうではなくて」

??桜田はため息をついた。どうしてこの人はこうも人の心情を察するのが下手なのだ。

??「あの人、その、カウンセリングを受けなくても大丈夫なので
しょうか? ?一人娘を失ったとたんに、私達が追い討ちをかける
ようにして問い詰めたものですから、きつと……」

??きつと、心に傷を受けているに違いない。彼女はそう思ってい
た。

??「……優しいですね、あなたは」

??「そんなことはありません」

??「……そうですか。彼なら、大丈夫ですよ。そう思っていないさ
い。彼は沙英さんと違って大人です。他人が無理やり連れて行かな
くとも、必要に駆られれば精神科なりカウンセリングなり受けにい
きますよ」

??「そうでしょうか」

??桜田はとてもそうなるとは思えなかった。どちらかといえば、
娘の仇をとるため、犯人を殺害する……そんな気迫さえ伝わってき
た。それに気付いていながら桜田が何も言わなかったのは、嘉蓋の
場所は自分達でも掴めないのだから、民間人が掴めるはずかないと
いう楽観のような予測。そして、彼女の私怨……つまり。

??十年間もの間残酷な殺人を理由もなく繰り返すような殺人鬼が
跋扈するなど、ありえてはならない。できることなら、彼が犯人を
殺してくれば、少しは平和になるのに。そんな、警察らしからぬ
情念からだった。

??

第十三話

??? 友の自宅では、沙英と友と慈亜が、夕飯を採っていた。

??? テーブルの上に並べられた様々な料理を、沙英と友は思い思いにつつついていく。

??? 「……おいしい?」

??? 「うん!」

??? 「うん、おいしいよ、お母さん」

??? 慈亜の質問にすぐに二人は答えた。友は毎日慈亜の手料理を食べているため特になにも思わなかったが、沙英はそうではない。久々にまともな食事をしたことも相まって、慈亜の料理が世界最高のようにも感じられた。

??? 「ふふふ、そう言ってくれてうれしいわ、沙英ちゃん」

??? 慈亜は頬に微笑みをたたえたが、それは少しだけこちなかつた。それは彼女が沙英に言わなければならぬことの重さゆえであった。悟られたか、と彼女は不安になったが、沙英にはもちろん、娘の友にも悟られた様子は見当たらなかった。二人ともつかの間の幸せを目一杯楽しもうとするかのように歓談している。

??? 「うん、おいしいね、友」

??? 「でしょ? ? 私も好きなの」

??? お味噌汁を飲みながら、楽しそうな会話をする二人。もしかしたら自分の一言が二人の、主に沙英の幸せを奪ってしまうのではないかと、と慈亜は思った。

??? 「……沙英ちゃん」

??? それでも静かに、彼女は口を開いた。大丈夫。きっと上手くいく。先ほども思ったように自分に言い聞かすが、不安は晴れない。不安はなくならないが、彼女は勇気を持って、沙英に必要なことだと信じて、言った。

??? 「……沙英ちゃん、カウンセリング、受けてみる気はない?」

??「…………え？」

??沙英の動きが止まった。あまりに突拍子もないことだったらし
く、彼女は何を言われているのか理解できないようだった。?

??友は慈亜に感心したような表情を見せた。慈亜がカウンセリン
グという単語を知っていることが、意外だったのだ。そして、その
単語にマイナスのイメージを持つていないことや、沙英に配慮して
精神科を勧めなかったことも、同様に感心していた。

??「…………カウンセリング？」

??「ええ。カウンセリングっていうのは…………その、相談するこ
ろよ」

??沙英にマイナスイメージを植え付けないよう、探りながら説明
する。

??「…………相談? ……何を相談するの? ……人生の悩みとか？」

??「ええ、そうよ」

??沙英の表情は明るくならない。

??「…………嫌。私のこと、友やおばさん、おじさん以外には誰にも
知られたくない…………っ」

??沙英はかぶりを振って、自らの体を抱きしめた。

??「…………ごめんなさい、おばさん。お話はうれしいけど、私は…
…………」

??誰かに自分の事情が知られる。それは沙英にとって、恐怖以外
の何ものでもない。

??「…………そう。別にかまわないのよ」

??こんな様子では精神科になんてとても連れていけない。慈亜も
友も、同じことを考えた。

??「…………わかってくれてありがとう、おばさん、友」

??沙英はお礼を言うと、慈亜と友を抱きしめた。二人の温もりが
沙英に伝わる。

??「…………本当に、ありがとう」

??二人を離すと、沙英はお礼を言った。

?? 「ううん、気にしないで」

?? 「気にしないで、沙英ちゃん」

?? 二人がそう言った、その時。

?? ピンポーン……。

?? 大臣家のインターホンが鳴った。

?? 「お父さんかな？ 私、出てくるよ」

?? 「そうかしら？ あの人は鍵をちゃんと持っていつてるし、宅配便じゃないかしら？」

?? 「かもね」

?? そう言つて友はリビングを出て、玄関に向かっていった。

?? 「ねえ、沙英ちゃん」

?? 二人きりになったところで、慈亜が沙英に話しかけた。

?? 「なに？」

?? 「あなたは、友のことをどう思ってるのかしら」

?? 慈亜がそう聞いたのには、ある理由がある。

?? 沙英がこの家に入って来たとき、彼女は友に抱きついた格好だった。それから、沙英は友の隣、友の近くを離れようとはしない。その情景が、慈亜の目には沙英が友に依存しているとしか見えなかった。もし依存しているとしても慈亜はすぐに引き離すようなことはしないが、二人の扱い方を考えることはするだろう。

?? 「……親友、だと思う。親友でいたい。……けど、私なんかが親友でも、いいのかな……」

?? 沙英は継るような視線を慈亜に向け、自分の心を決めかねているような言葉を口にした。

?? 「いいに決まってるじゃない。あの子もあなたを親友だと思つているから、こうして助けているんでしょ？」

?? 「……」

?? 沙英はすぐに頷くことができなかつた。友はただ同情してくれ

ただで、親友だからではないのでは……そんな思いが彼女を縛っていた。

??「……今は、まだそう思えないかもしれないわ。……でもね」

??慈亜は沙英の手を取って、しっかりと両手で包み込んだ。

??「でもね、いつか、いつかきつと、友のことを親友だ、って思える日が来るわ」

??「……ほんとう?」

??「ええ。本当よ」

??しっかりと、慈亜は頷いた。

??「あなたがわからなくても、あなたに自信がなかったとしても、友も、私も、あなたの親友よ」

??「……」

??慈亜にここまで言われても、沙英の中に自信が生まれることはなかった。沙英の中はただ不安だけが渦巻いて、ただ心細さだけが漂っている。

??「……友」

??それを払拭しようと、試しに呟いてみる。少しだけ、心の中が暖かくなったような気がした。攫われてからもう六日。その内の半分を友と共に過ごした。友が家のインターホンを押す前までは、寂しくて、不安で、怖くて、死にたくなるぐらい心細かった。けれど、友が来てからは、違った。不安で、怖いのは変わらない。でも、寂しいのはなくなった。心細さも幾分か晴れた。それは全て、隣に友がいたから。

??「……友と親友で、いていいの?」

??「ええ、もちろんよ」

??「親友で、いていい……」

??もう一度自分で呟いて、慈亜に認めてもらおう。すると沙英の中に、友と親友でもいてもいいという確証が僅かに生まれる。

??「……友と、親友」

??嬉しい。呟くだけで、胸の奥が、ほんわりと暖かくなっていく。

??「……友は？」

??ふと、そこで。慈亜がキョロキョロと辺りを見回した。

??「あれ、おかしいわね。いくらなんでも遅い気が……」

??「私っ、見て来ます！」

??「沙英ちゃん!？」

??嫌な予感がして、沙英は駆け出した。もしかして、もしかしたら! ? 玄関へ出る。扉は開いたまま - 宅配便の姿もない - どころか、友の姿も、誰の姿も見えない - - !

??「友！」

??叫んで沙英は飛び出した。このときの彼女は、怯えて不安に震えていた沙英とは思えないほど、堂々とした声だった。

?? - - しかし。

??「きつ……！」

??突如後頭部を強打された。沙英は悲鳴を上げきる前に気絶していた。

??「……沙英ちゃん!？」

??ほんの少し経って慈亜は玄関に着いたが、友も沙英も、すでにどこにもいなかった。

??「……そんな……う、嘘でしょ……?」

??娘も、親友も。慈亜にはどちらも自分の手から消えてしまったような気がした。ふと、玄関前の床に目があった。

??「……っ！」

??それは、数滴の血液だった。消えた二人、血液、そして、殺害予告。彼女の中でそれらの単語が一つの意味をもって繋がった。

??「……友、沙英ちゃん」

??絶望に包まれ、慈亜はその場にへたり込んだ。

第十四話

やっと、やっと、やっと見つけた。

?? 沙英の家とは全く違う見知らぬ家に沙英が入っていくのを見た彼…… 嘉蓋栄は、玄関先で恍惚の表情で立っていた。

?? 彼は沙英を逃がしてからずっと、家の前に張り込んで、チャンスを待っていたのだ。マスコミがいなくなるのを待って、完全に一人きりになるのを待った。そして、沙英を逃がして三日後。ようやくマスコミの張り込みがなくなつて、侵入しようかと思つた矢先に見知らぬ少女、大臣友がやってきたのだつた。彼女が帰つてから侵入しようとしたところで、夜が来てしまった。彼は捕らえていた沙英そっくりの少女を料理するため、一旦自宅 一時的なものではないが に、戻つた。

?? 「…… やつと、やつと、やつとやつとやつと遊べる……！」
?? それから、一人になるのを待った。けれど、いつまで経つてもその時はやってこない。だから、彼は待ちきれなくなった。

?? 彼はインターホンを押すと、扉を開けた時に影になる場所に立つ。すぐに宅配便か何かと勘違いした友が出てきた。手に持っているハンマーを振り上げ、友の後頭部、それも首に近い部位を目掛けて振り下ろす。

?? 「かつ」

?? 短く息を吐いて友は倒れた。

?? 嘉蓋は友の体を持ち上げ、急いで目の前の道路に停めてある車に積み込んだ。

?? さつき隠れていた場所に戻ると、じっと動かなくなる。あとは沙英が出てくるまで待つだけ。

?? そう思つてしばらくすると、目的の少女が飛び出してきた。

?? 「友！」

?? やつと、やつとやつと、やつと遊べるっ！

?? 気が付くと、嘉蓋は沙英を気絶させ、彼女を車のトランクに詰め込んでいた。友と一緒だったが、二人とも小柄なのだ、余裕をもつてトランクに収まった。

?? 「……ふふふ」

?? 嘉蓋は車に乗り込み、エンジンをかけ、アクセルを踏み込んだ。
?? 「沙英ちゃんっ!？」

?? それと同時に、慈亜の姿が彼のサイドミラーに映った。

?? ダメ。これは俺のおもちゃ。

?? 心中でほくそ笑んで、彼はさらにエンジンをふかす。

?? 彼の隠れ家に一直線に向かって。

??

?? ……ここは……。

?? 沙英が再び目を覚ましたのは、事件の時とほぼ同じような部屋だった。しかし、今回の部屋にベッドはなく、手足の枷もない。彼女は鋼鉄の頑丈な椅子に鎖でがんじがらめに縛られている。どんなに激しく動いてもまるでびくともしない。

?? 「はあ、はあ、はあ、はあ……」

?? 動くことは早々に諦め、彼女は辺りを見回す。前には壁があるだけ。

?? 右にもやはり壁。左には……。

?? 「……うそ」

?? 同じように縛られた友がいた。信じられない、といったふうに首を振るけれど、友の短い呼吸は、それが現実だと沙英に突きつける。

?? 「……ん」

?? 友は目が覚めると、すぐに周りを見回し、沙英の方を見た。

?? 「沙英」

?? 沙英が縛られているのを見て、助けようと体を動かし……それができないことに気付くと、一気にパニックに陥った。

?? 「え、な、なにこれっ!? ? 沙英、大丈夫!? ? これ、一体何が……」

?? たとえ縛られて身動きできなかつたとしても、友は真っ先に沙英の心配をした。……正しくはそうではなく、真っ先に沙英の心配をすることで、自分の身に起こった事を認識しないようにしたのだ。もちろんそれは無意識下のことで、友が思ったのは間違いなく沙英のことだった。

?? 「わ、私は大丈夫、友は？」

?? 沙英も、一人ではないことに少しだけ安心する。絶望もしている、恐怖もある。けれど、一人ではないことが、沙英を少しだけ落ち着かせていた。

?? 「私も大丈夫。……ここ、どこだろう？」

?? 「ここは僕の部屋だよ」

?? 部屋の扉が開き、男……嘉蓋栄が二人のいる部屋に入ってきた。彼の肩には一人の少女が担がれている。二人からよく見えるところに椅子を置くと、少女を座らせる。そこで、沙英と友は息を呑んだ。

?? 「っ!?!」
?? 椅子に座らされたのは正確に言えば少女ではない。少女だった遺体である。

?? 沙英の身代わりとして苦痛の限りを尽くされた、哀れな少女の残骸だった。

?? 「え、こ、この子、は……」

?? なんの意図を込められたのかは知らないが、その遺体は顔だけは無傷だった。それが災いして、友は気づいてしまう。

?? 遺体が、沙英そっくりの顔をしていることに。

??「うん、そうだよ。この子は沙英ちゃんの代わり」
??「っ」

??沙英は目を見開いた。自分のせいで。自分が逃げたせいで、見
も知らない女の子が、こんな残酷な目に遭わされたのだ。

??「……もう逃げないよね？」

??沙英は必死に頷いた。嘉蓋の口調が、逃げればまた無関係な人
間を殺すと物語っていた。

??「沙英！ ？何言ってるの！？ ？こんなやつ言いなりにな
んかなる必要ないっ！」

??「……君からにしようか」

??沙英のために叫んだ友は、全身を強張らせる。

??「……ふふふ」

??いやらしく笑いながら、彼はポケットからひとつの道具を取り
出す。

??なんの変哲もない、ホームセンターならどこでも売っている、
ニツパー。

??「……これでどこまで切れるかな？」

??縛られている友の手を取り、嘉蓋は彼女の細長い指先にニツパ
ーの刃をあてがう。

??「ま、待つて、待つてっ！」

??恐怖に耐えきれず、友はダメ元で叫ぶ。

??「うん、わかった」

??意外とすんなり、嘉蓋は離れた。そして、二人から離れ、何も
言わずに部屋から出ていった。

??「……ゆ、友、大丈夫？」

??「……ごめん、怖いよ、沙英」

??友は静かに思う。これで終わりなはずがない。どうせ別の道具
でも取ってきているのだろっ。そんなことは目の前に置かれた沙英
そっくりの遺体を見れば容易に想像がつく。

??……どうして私がこんなことに。沙英と一緒にいたからだ。友

はそれを恨みはしなかった。全ては、覚悟したこと。沙英が攫われたと知って、さらに心に酷い傷を負っていることを知って、なおかつ犯人が未だに沙英を狙っていることも知って。それでも、友が沙英から離れなかったのは……。

??「……………」

??それは、友自身にもよくわかっていない。親友として心配だったのかもしれないし、ただの同情だったのかもしれない。家族に向ける愛情も感じていたかもしれない。そして、その全てである可能性も、もちろんあった。

??「……………お別れだね、沙英」

??「ど、どうしてそんなこと言うのっ!?!」

??「……………」

??友は何も言わなかった。次にこの部屋の扉が開くときが、自分の最期。そう直感した。もう自分は何があっても助からない。唯一の救いとは言え、苦しんで死ぬか楽に死ぬかのどちらか。……………それならば、ひとつ時間稼ぎでもしてやろう。友はそう考えた。もう助からないのなら、せめて友達のために華々しくかっこよく。そう考えることで、友は恐怖を打ち消した。

??「待たせたね」

??沙英は前のように、次現れるのはシャムであって欲しいと願っていた。けれど、その願いは打ち砕かれる。不気味な笑顔を浮かべた嘉蓋はカートを持ってきていて、そしてその中には大小様々な道具が所狭しと並べられていた。雑然としているようで、その実、嘉蓋本人には確実にわかるよう整頓されていた。

??「さて、と。楽しもうかな」

??「ま、待って!」

??沙英は、嬉しそうに言った嘉蓋の言葉を遮った。彼は少しイラついたような表情をして、彼女の方を向く。

??「……………なに?」

??「わ、私から、先にやってください。ゆ、……………その子は、関係

ないです。さつき会ったばかりの見ず知らずの他人です。だから、
お願いします」

?? 「嫌」

?? 嘉蓋は沙英の必死の懇願を軽く嘲った。

?? 「ど、どうして」

?? 「嘘ついてまで沙英ちゃんが守りたい友達ってさ、壊してみた
くならない？」

?? 「ま、まって、お願い、本当に彼女は関係ないんです、だから
?? 「もしそうだったとしても、僕が殺すと決めた人間なんだから
やめないよ。やめたくないし」

?? それ以降の話を打ち切ると、彼はカートの中を無造作にまさぐ
り、カッターナイフを持つ。幅の広い、しっかりしたタイプのもの
だ。

?? 「さて、と。まずは……そうだね。これで爪でも剥ごうかな」
?? 「え」

?? 嘉蓋は言ったことを実行するため、友の手を取った。もちろん、
沙英によく見える方を、だ。

?? 「ね、ねえ、ほ、本気で言ってるの？」

?? 爪を剥がれるくらいは想像がついたが、まさかカッターナイフ
でだなんて。そもそもどうやってこんなもので爪を剥ぐ気なんだろ
う？

?? そんなことを考えているうちに、？

?? 「いやっ、友ッ!？」

?? 沙英の叫びとほぼ同時。

?? 友の絶叫が、部屋中に響き渡った。

??

??

第十五話

?? 友の絶叫が密室で響き渡る少し前。

?? 「……………」

?? 少年が、警察署の前で佇んでいる。テレビ局のディレクターが取り調べを受けたこの署では、今現在少しでも嘉蓋の情報を得ようとしているためか、警官がひっきりなしに出入りしている。その様子を眺めながら、彼は胸に手を当てて、何かしらの覚悟を決めているようだった。

?? 「なにをしているのですか、嘉蓋 ? 紗武君」

?? ぼん、と彼の肩に手をかける人物がいた。紗武が振り返ると、そこにいたのは人のよさそうな笑みを浮かべたコートを着た警察官、刑部 ? 敬二とその部下桜田 桂香だった。

?? 「……………」少し、決心をしていただけです」

?? 紗武は静かに答える。

?? 「何の?」

?? 「……………」僕が物心つくころには、もう始まっていたことで、絶対に許されてはならないことを……………あなたたちに、言う決意を」

?? 刑部も桜田も、内心は大はしゃぎである。十年來の連続殺人鬼、その情報が手に入る。これほど嬉しいことはないだろう。しかし、彼らはそれをかけらも表に出さなかった。手放して喜んで、紗武に不快な思いをさせるわけにはいかないのだから。

?? 「そうですね。つもる話もあるでしょうが……………まずは、あなたの家に案内させていただけますか?」

?? 紗武はうなずいて歩き出した。

?? 「徒歩でいける場所なのですか?」

?? 「……………電車です」

?? 「……………」

?? 車で案内してもらいたい気持ちを抑え、二人は紗武についてい

く。電車での道のりを知っていたとしても、車での道のりを知っているとは限らない。ここは早さよりも確実性を優先すべき、と二人は判断した。

??「ところで、何かお話があるようですが」

??「……はい。僕の父親の話です」

??「紗武は歩きながら、悲しそうな表情を作った。」

??「僕の父親は、人を殺すのが趣味の人間です。今も、それは変わりません」

??「……どうして、そんな趣味が？」

??「わかりません。僕にとって、父が人を殺すのは、食事をすると同じように、当たり前のことだとずっと思っていたし、今でも、趣味なんだからで済ませてしまっています」

??「……どうしてですか？」

??「……考えると、頭が痛くなって、死にたくなるんですよ」

??「押し殺すような声で、紗武は言った。」

??「……そうなんですか」

??「ええ。……僕は、警察に捕まるべき人間です」

??「……どうして？」

??「急に話題を変えた紗武に、桜田が聞いた。」

??「僕は、中学三年生になるまで、父のしていることが間違っていることだと気付きませんでした」

??「無理もない話であろう。彼は正しい倫理を小学校から学んでくる度に、栄にそれを『訂正』されていたのだから。彼が反抗期に入つたのは高校生になってから。それまでは父のことを従順に守る、『素直でいい子供』であった。」

??「……そ、そのくらい、罪にはならないわ」

??「……違います。僕は、手伝いをしていた」

??「桜田、刑部、二人の表情が険しいものになる。」

??「……直接こそしなかったけれど、道具を運んだり、遊んだあとの後片付けをしたり、逃げるのを手伝ったり」

?? 長い間栄のことを捜査していた刑部は、紗武の話聞いてようやく腑に落ちたことがあった。

?? 栄の犯行は原始的かつ短絡的。どう考えても真つ先に捕まるタイプである。それなのに遺体の発見場所が数千キロ離れていたり、遺体遺棄と移動の速度が速すぎるなどの謎が、全て解けた。紗武が遺体を遺棄している間、栄が逃げていれば、かなりの時間を稼げる?? 「どうやってお父さんと合流していたの？」

?? 「……昔は、携帯とお金もたされて、車で山奥連れていかれて埋めてから連絡した場所に電車で来るように、って言われてた。必死になって探してたから、小学三年にはどんな場所でもお金さえ渡されたら行けるようになってました。

?? 中学生になってからは、あらかじめ隠し場所と次の隠れ家の場所言われて、そこまで電車でもかって埋めてました」

?? 「……その、電車でどうやって被害者を運んだの？」

?? 恐る恐る桜田が聞くと、紗武はこともなげに答えた。

?? 「父が遊んだあとの人って、原型留めてることの方が少ないんですよ。だから、大きな鞆に詰め込むのは簡単でした」

?? 恐ろしいことをなんでもないように語る彼に、悪意は感じられない。本気で、それが当たり前であるかのように思っているらしい?? 「……少し、話は変わりますが、聞いてもよろしいですか？」

?? この雰囲気切り替えるように、刑部が聞いた。

?? 「なんですか？」

?? 「あなたは どうして、私たちにこんな話をしようと思ったんですか？」

?? 「……それは」

?? 紗武は一瞬だけいい淀んで、すぐに口を開いた。

?? 「あのとき、気付いたんです」

?? 「……あのとき？」

?? 「父があの子を捕まえてきたとき、始めて思ったんです。僕は、今までなんてことをしてきたんだ、って」

?? 栄が紗武と同年代の人間を捕まえてきたのは、沙英が初めてだったのだ。それまではずっと、紗武より年上ばかりだった。

?? 自分で同年代、それも女の子。父親は、こんな子を苦しめて殺そうとしている。

?? 今まで感じ続けてきた違和感が疑念に変わり、すぐにおかしいと感じる確信に変わった。

?? そして同時に、彼は凄まじい罪の意識に囚われる。幼い頃からしてきた数々の業の全てを、彼はようやく自覚したのだった。

?? 「なんとかしなきゃ、って思ったんです。してはいけないことだったんだ、って気付きました。……だから」

?? だから、沙英の身代わりに殺されることも覚悟して、紗武は沙英を助けた。警察が沙英に気を取られている一瞬をつき、栄は逃げる事ができた。

?? 結果的とはいえ栄を逃がしたことで、紗武はなんのお咎めもなかった。けれど、その代わり栄が沙英に執心するようになり、そして、その結果。

?? 「お願いします、刑事さん。父を止めてください。これ以上、罪を重ねないようにしてください。……あの子を、父の手にかからないうちに」

?? 「……わかりました」

?? 刑部は神妙に頷いた。

?? 彼らが改札口に着くのとほぼ同時。

?? 彼らの目的地で、友の絶叫が響き渡った。このとき、紗武は沙

英と友が父に囚われていることを知らない。

??

??

第十六話

?? 最初の絶叫から約四時間。友はもう、悲鳴を上げることすらできない。爪はおろかもはや指も切りおとされ、腕全体に切り傷や穿孔痕が見受けられた。目からは赤い涙が流れ、瞳があつた場所にはもはや赤黒い塊しかない。耳たぶはなく、その穴からはロウソクが流れ、固まっている。唇は軽く縫われ、悲鳴を上げたり口を動かす度に痛むようになっていた。足はなく、周りには肉の塊が無造作に落ちており、足があつた場所の近くには、赤に染まつたミキサーが落ちていた。全身が真っ赤に染まり、友からはあらゆる反応が欠如している。

?? 友がこの状態になるまで、沙英は親友が痛めつけられる様をずっと見せつけられていた。嘉蓋の、『沙英のせいだ』と責める声に、凄まじい罪悪感を感じながら。それでも沙英は何度も何度もやめるように頼み込んだが、嘉蓋は全く相手にしなかった。

?? 教師たちに退学を勧められたときとは比べる余地もないほど、沙英の心は冷え込み、凍りつき、次第に何も感じなくなっていく。人形のようになっていく。

?? 「さて、と。仕上げ仕上げ」

?? 嘉蓋は血サビがこびりついたチェーンソウを手に取り、エンジンをふかす。

?? 「……あつ」

?? 沙英は親友が殺されることを感じて、短く声を上げた。凍ってしまったと思っていた感情が再び吹き出し始める。対する友は、ぴくりとも動かない。

?? 嘉蓋は金切り声を上げるチェーンソウを友の胴体に向けると、狙いを定めるようにピタリと突きつける。

?? 「ま、まって、お願い、殺さないで……っ！」

?? 沙英が、悲痛な声で懇願する。

?? 嘉蓋は何も言わず、チェーンソウを友に突き入れた。
?? 「……………」

?? うめき声あげずに、友は完全に息絶えた。
?? 「……………っ！」

?? 「さあ、楽しもう！ ? 前座は終了、次は君だっ！」

?? 嬉々として近づいてくる嘉蓋に、沙英は何も言わなかった。もう耐えられなかったのだ。

?? 「……………」

?? 自分が死ぬ、とわかってても、沙英は怖くはなかった。むしろ、友と同じところに逝ける、と嬉しささえ込み上げてきた。

?? 「……………ふふふ、さあ、始めようか……………」

?? 「お父さん」

?? 嘉蓋が沙英に触れようとしたところで、部屋の扉が開いて、三人の人間が入ってきた。嘉蓋の息子である紗武と、嘉蓋を追っている刑部、桜田の二人だった。

?? 「……………っ。紗武。お前、裏切ったのか？」

?? 悲しい表情のまま、紗武は首を振った。

?? 「違つよ。僕は、お父さんに普通の人間になつて欲しいんだよ」

?? 「普通？ ? 普通とはなんだ？ ? こうやって父親を陥れることかっ！？」

?? 嘉蓋は沙英を殺すことも忘れて、紗武に突っかかる。

?? 「違つ、違つよ、お父さん。陥れてなんかいない。お父さんがしているのは間違っていることだよ。お父さんは、悪いことではない、つて言つてたけど……………」

?? 「お前、父親の僕より他の人間を信じるのか!？」

?? 激昂する栄に、紗武は静かに頷いた。

?? 「僕は、お父さんを信用できない。できないよ……………」

?? 「今まで誰が食わせてやったと思つてる？ ? その恩を仇で返すのかっ!？」

?? 「……………そうなることになつたとしても、僕はお父さんに、ま

もになつてほしい」

?? 「ふざけるな、この親不孝者がっ！」

?? 栄はカートの中にあつた鉈を手に取ると、思い切り振り上げ、紗武に向かつて行つた。死ぬ事を覚悟していたのか、紗武は父親を見据え、一步も動かない。

?? 「ダメですよ。嘉蓋 ? 栄」

?? 紗武に刃が振り下ろされようとしたとき、今まで静観していた刑部が前に出てきて、鉈を持つ栄の手首を掴んだのだ。そのまま手首を返し、背中に回つて栄が動けなくなる。

?? 「ぐっ」

?? 「嘉蓋 ? 栄。嘉蓋 紗武殺人未遂の現行犯で逮捕します。余罪がゴロゴロ出てきそうですね」

?? もちろん、その余罪の中には十年来に渡る連続殺人も入っている。とりあえず今は拘束しておけば、少なくとも逃げられる事はない。

?? 「……………」

?? 栄は観念したのか、短く項垂れた。

?? 「……………君、大丈夫？」

?? 栄が捕まつたことを確認すると、紗武は沙英の元に行き、拘束を外した。

?? 拘束が外れても、沙英は椅子から離れようとはしなかった。逃げたらまた誰かが死ぬ、という強迫観念に縛られているのだ。

?? 「もう大丈夫だよ、だから、ね？」

?? 「……………大丈夫……………」

?? 沙英は掠れた声で囁くように言った。

?? 「うん、もう大丈夫。もう君を狙う人も、君の身代わりに人を殺す人もいないよ」

?? 「……………」

?? 沙英に見つめられて、紗武はぞつと背筋に冷たいものが走つた。沙英の表情が、何を表しているのかわからなかったからだ。絶望、

恐怖、怒り、焦燥、悲しみ、苦しみ……。そのどれかのように思えたし、その全てにも思えた。

?? 「……犯人は？」

?? 何も映さず、何処も見えていない瞳に僅かだが力が戻る。

?? 「……刑事さんに捕まったよ」

?? 「……」

?? ふらりと沙英は立ち上がると、栄が使っていたカートに近づき、中を弄る。

?? 「何をしているの？」

?? 紗武が聞くと、沙英はなんでもないことのように答えた。

?? 「犯人を殺すの」

?? 次に振り返った沙英の手には、鋭く研がれた包丁が握られている。切っ先は変わらず、栄の方を向いている。

?? 「沙英ちゃん、落ち着いて」

?? その様子に気付いた桜田が、刺激しないように言う。

?? 「落ち着いている、私は落ち着いてる」

?? 表情は何も浮かべず、静かな、けれど確かな憎悪を心の内に灯しながら、沙英は栄に一步近付いた。

?? 「……沙英さん、彼はもう捕まりました。あとは法の裁きを…

……」

?? 「それが？」

?? 沙英は冷酷なまでに冷たい声で言った。

?? 「捕まったからなんですか？　法の裁きつて決まり文句みたくに言いますが、それが下るのに何年かかるんですか？　私の代わりに法が裁くというのなら、もちろん犯人を殺してくれるのでしょうか？」

?? 沙英は淡々と言いながら、また一步近付く。誰も彼女に近付けないのは、沙英が暴れることを考えて、とにかく説得することに重きを置いているからである。

?? 「時間はかかります。けれど、この犯人に限っていえば、死刑

はもはや確定です。証拠も次から次へと上がっています。だから」
?? 「死刑というのは、残酷なんですか? 一週間かけて苦しめたりとか、想像も絶するような痛みを与えたりするんですか?」
?? 「また一步近付きながら、沙英は言う。」

?? 「……それはできない」
?? 「おかしいと思いませんか? 犯人は何人もの人を苦しめて、私のことを一番に思ってくれた友に、あんな、あんな悲鳴まで上げさせてツ! ?それで、捕まって、死刑で、死ぬのは一瞬? ?ふざけないでっ!」

?? 沙英は感情をせき止める堤が壊れたように怒りを露わに叫んだ。
?? 「落ち着いて、沙英ちゃん。絞首刑っていうのもある程度苦しむから……」

?? 「だからなに!? ?友がされたみたいにカッターナイフで爪を剥がされる痛みがあるの!? ?首の皮を切り取られる恐怖があるのっ!? ?目を少しづつ削られて、目をハンドミキサーで抉られる苦しみがあるとでもいうのっ!? ?私は、犯人が友にした全てのことを犯人が受ける以外には、認めないっ!」

?? はあ、はあ、はあ。沙英の短い呼吸が静かになった部屋に響く。
?? 「沙英ちゃん、気持ちはわかるわ。でも、あなたがそれしたら、やつぱり、栄と同じことをすることになるのよ?」

?? 「友の仇をとるためなら、犯人と同じ罪を受けても構わない! ?私は、私は、その人を殺すっ!」

?? 沙英は走り、一気に距離を詰め、憎悪が込められた刃を栄に向けて思い切り突き出した。

?? 「……ダメ」
?? 桜田が栄をかばう様に出て、沙英の手首をとった。刑部が栄にしたように手首を返すことをせず、そのままの体制で説得しようとする。

?? 「あなたの気持ちはよくわかる。わかる。けど、ガマンして。お願い。酷いこと言ってるのはわかっている。けど、あなたに殺人者

になつてほしくないの……」

?? 「そんなもの、関係ないっ！　？私は、その人を、そいつを殺さなきゃ、いけないのっ！」

?? 沙英は桜田から逃れようと、必死に暴れるが、桜田は彼女の手を掴んで離さない。

?? 「……友ちゃんがそんなことを望んでるとでも」

?? 「誰が友のためだなんて言ったのっ！　？私は私がそいつを殺したいから殺そうとしてるんだっ！　？私は復讐したいんだっ！

友は関係ないっ！　？それに、それに……ッ！」

?? そこで、沙英の力が少し抜けた。彼女の瞳から、一筋透明な液体が流れる。

?? 「……それに、もし友が幽霊になつてるとしても……。あんな殺され方して、まともな友が残ってるなんて、思えないよ……。桜田さん、知ってる？　？友、殺される瞬間、悲鳴を上げなかったんだよ？　？痛すぎて、苦しすぎて、なんにも感じなくなっちゃんだだよ？　？私のせいで！　……私の、せいで……」

?? 沙英の腕に力が抜けたことを感じて、桜田は手を離れた。沙英の腕はそのまま、力なく垂れ下がる。

?? 「自分を責めないで、沙英ちゃん」

?? 「無理だよ。私、友のお母さんになんて言えばいいの？　？私が犯人から逃げたから、あなたの娘さんは殺されました、つて？

？誰がどう見ても私のせいじゃない！　？……犯人を殺すな、自分を責めるな、それじゃあ私はどうすればいいの？　？被害者ヅラしてさめざめと泣けつて？　？少なくとも二人は私のせいで死んだ人がいるのに!？」

?? 「……っ」

?? 桜田は何も言えなかった。この事件は法的には間違いなく栄が悪いと断じられるだろう。けれど、何も知らない、いや、犯行声明を聞いた、ほんの少しだけ知っている民衆は一体どう思うだろう？

？沙英を被害者ではなく、加害者の一人であると断じる可能性が

ないとはいえない。

?? 「……ほら、桜田さんも、私が悪いと思ってる」

?? やつぱりね、というふうな顔を沙英は浮かべた。

?? 「違うわ、沙英ちゃん。あなたは悪くないの。悪いのはあなたを殺すと決めた犯人。だから、そんな風に自分を追い詰めないで」

?? 「……私は……私は友を殺したも、同じなんだ。だから……」

?? 沙英は静かに、桜田の言葉を否定すると、手にした包丁をゆっくりと持ち上げる。

?? 「桜田さん、何をしていますかっ！　早く彼女を抑えてっ！」

?? 「はいっ！」

?? 何を言われているのか桜田にはわからなかったが、とりあえず彼女は動いて、沙英を抑えにかかった。桜田が沙英の手を掴むのと包丁が沙英の首の薄皮を突き破ったのとは、ほぼ同時だった。彼女の首筋から血が少し流れる。

?? 「……何を、しているの？」

?? 「友のところに逝こうかな、って。そうすれば、友、許してくれるかな、って……」

?? それは説明をしている口調ではなかった。まるで誰かに祈るような、まるで誰かに言い訳をするような、そんな感じだった。

?? 「……少し、ついてきてくれる？　その、事情聴取とか、あるから……」

「……」

?? 桜田はここでの説得を諦めた。とりあえず今はここから離れて、時間をおかなくては。そう考えた桜田は、沙英も警察署に連れて行くことにした。

?? 「……こちら桜田。嘉蓋栄を殺人未遂の現行犯で逮捕しました。応援お願いします……」

?? 『了解』

?? 無線から流れる声が、やけに響いた。

?
?

最終話

?? 沙英はそれからのことをよく覚えていない。ただ、彼女は気がついたら友の家の前にいた。警察署にいたときのことは何も覚えていない。どうでもいいことだからか、覚える余裕もなかったからなのかはわからないが。

?? 「……沙英、ちゃん」

? 玄関先で絶望していた慈亜が、少し安堵した表情で沙英を出迎えた。そのことが、沙英の胸を締め付ける。

?? 「……ごめんなさい、慈亜さん」

?? 深く、深く沙英は頭を下げた。

?? 「ど、どうしたの、沙英ちゃん？」

?? 慈亜は沙英の態度である程度事情を察した。けれど、慈亜は信じたくなかった。

?? 「わ、私の」

?? 沙英は、そこから先を言おうとした。けれど、寸前になって、言葉が止まった。

?? もし、言ったら。この人は私を罵って、犯人と同格に扱うのではないか。

?? そんな恐怖が、沙英の中に生まれた。

?? 「……ダメ。」

?? 沙英は思った。

?? 私のせいで、友が死んだのに変わりないから。ちゃんと、怒られないと。ちゃんと、罵られないと。ちゃんと、別れないと。そうしないと、きっと私は、ダメになっちゃう。

?? 「友は……殺されました」

?? 慈亜の表情が固まる。

?? 「……え？」

?? 「私が、友の家に入ったから。……私の、せいで」

?? 沙英はそれだけを言うと、じつと言葉を待った。もしかしたら殺されるかもしれない。そんな不安があったのにも関わらず、彼女は逃げなかった。

?? 「……友は、死んだの？」

?? 「……うん」

?? 「……どんな死に方だった？ ？知ってる？」

?? 「……綺麗な、死に方だったよ。声も上げずに、殺されちゃった」

?? 沙英は嘘をついた。申し訳なく思う一方で、本当にそうだったらしいのに、とも思った。いや、それ以前に、全てが嘘だったら、全てが夢だったら。

?? そうだったら、いいのに。

?? 「……沙英ちゃん、こっち来て」

?? そんな他愛のない想像をしながら、彼女は言われた通り、慈亜に近付いた。

?? 「……よく、生きて帰って来たね」

?? 慈亜は辛そうにそういいながら、沙英を抱きしめた。

?? 「……」

?? 「本当に、辛かったよね。友が死んだのは自分のせいだ、なんて言つて、全部背負い込んで、苦しかったのよね」

?? 「……違う、私は」

?? 「大丈夫。友はきつと、幸せだったわ」

?? 「……そんな」

?? そんなこと、あるものか。あんな殺され方されて、幸せなわけがない。沙英はそう確信していた。全ては自分のせい。こんな風に優しく抱き締めてもらう資格なんてない。

?? 「……きつと、あなたは私に優しい嘘をついてくれたんだと思う」

?? 沙英の胸に、楔が打ち込まれたような痛みが走った。

?? 「それは、友が苦しまずに死ねたってことかもしれないし、声

も上げずに死んだってことかもしれない。……けど、いいの。私は大丈夫だから。あの子がいなくなっただけで本当に辛いけど……」

??「そこで慈亜は言葉を切った。」

??「辛いけど、あなたのことは、責めないわ」

??「ぎゅっと、沙英はさらに力強く抱きしめられた。」

??「……だから。あなたのことを責めないから。何も言わないから。だから、ここにいてちょうだい。お願いだから、私とあの人と一緒にいて」

??「あの人、というのは友のお父さんであろうことは容易に想像がついた。まるで強迫めいた言葉が、沙英の断ろうとする思いを鈍らせる。」

??「お願い、沙英ちゃん。私は友の代わりがほしいわけじゃないの。私は、友のことをちゃんと受け止められるようになりたいの。でも、今それをできそうにないから。私の娘になって、一緒に手伝ってほしいの」

??「懇願するように言われ、沙英は断ることができなかった。」

??「……うん」

??「きつと、友の死を受け止められるようになったら私は要らなくなるんだろっとな、と沙英は思った。今の慈亜にその気はないだろうけれど、実際に時が経てば、なぜ自分を養っているのかわからなくなっただけで、そして、慈亜は言うのだ。」

??「『出て行って』」

??と。

??「沙英はそんな想像をしたが、慈亜の娘になることを断らなかつた。なぜなら、そのことだけが、友が死ぬ原因を作った自分にできる最高の償いのように思えたからだだった。」

??「……じゃ、家に入ろう、お母さん」

??「……ええ」

??「ゆっくりと慈亜は沙英を離し、沙英に導かれるまま家の中に入った。」

?? 母親の 慈亜は不安で、怖くて、耐えきれなくて沙英を娘にした。
?? 娘になつた沙英は辛くて、苦しくて、自分を捨てる気持ちで娘
になつた。

??
?? 始まりは暗いものだった。友を失つた慈亜はしばらく何もでき
なかつたし、友を喪わせた原因の沙英は、罪悪感で狂いそうになり
ながらも家事を手伝つた。

?? 父親の誠司は、いきなり失つた娘と入れ替わるようにして娘に
なつた沙英に戸惑いながらも、次第に彼女を受け入れた。そして、
そして。

?? 「お父さん、お母さん、おはようございます」

?? 朝、すでに大学に通う用の服に着替えた大臣おおとみ ? 沙英さえが、目を
完全に覚ました状態で起きてきた『両親』に挨拶した。

?? 「おはよう、沙英」

?? 「……おはよう、沙英」

?? 母親の慈亜は笑顔で、父親の誠司は不機嫌そうに挨拶を返した。

?? 「お父さん、お母さん、朝ご飯、できていますよ」

?? 「あら、ありがとう」

?? 「……うむ」

?? 慈亜は並べられた料理を前に、嬉しそうにテーブルに着いた。
対照的に誠司は、気難しそうな顔をしながら仁王立ちしている。

?? 「……どうかされましたか？」

?? 「気に食わん」

?? 短く、彼は言った。

?? 「……すみません。今すぐ作り直します」

?? 朝早く起きて作った朝食を下げようとした沙英の手を、誠司がつかんだ。

?? 「それが気に食わんと言っている。お前はなんだ？ ？ 召使いか？ あれから一年、私もお前が朝からいる風景にも、朝に友がいない光景にも慣れた。だがお前の口調や態度はいつまで経っても慣れん」

?? 「……すみません、私、不勉強ですから、正しい敬語が」

?? 「そんなことではないのだっ！」

?? 手を掴んだまま、彼は思い切り沙英を怒鳴りつけた。沙英はなぜ怒られているのかわからず、ただ身が縮こまるばかり。

?? 「もう一度聞こう。お前はなんだ。お前は誰になった。お前は何になった。答える」

?? 「……私は……」

?? 沙英は恐る恐る、もはや建前のようになった『関係』を言った。

?? 「私は……お父さんの、娘です」

?? 「違う」

?? 沙英はドキツとした。表向きは確かに沙英は慈亜、誠司の娘だが、沙英がしているのはそのまま召使いのようだった。

?? 「お前は召使いだ。そうなるうとしてしている節さえある。お前は娘か？ ？ ならばなぜ敬語を使う。ならばなぜ私達より先に起きる事を自らに課している。ならばなぜ食事を作るのを自分の役目だと考える。私達に気に入られようとしてそうしているのならまだわかる。だがお前は自ら進んで娘以外の何かになるうとしている。何故だ？」

?? 沙英は問い詰められて、何も答える事ができなかった。

?? 「あなた、そんな辛く当たらなくても……」

?? 「辛く？ ？ 辛くあたっているのは誰だ？ ？ 私か？ ？ 沙英

か？ ？ 私はもう沙英を本当の娘のように思い始めている。……死んだ友と同じぐらいにな」

??友の名前を出されて、沙英の表情が固まる。けれど乖離状態になつたわけではなく、ちゃんと見えているし、聞こえてもいる。

??「それなのにお前はなんだ？　？口ではお父さん、お母さんと言いながら、していることは召使いとそう変わらない。私は召使いを住まわせるために働いているのではない！　？娘のために働いているのだ。そう、お前のために」

??「……そんな、私は、召使いなんて、なるつもりなどは……」
??沙英は小さく答えた。

??「ならばお前は何になるつもりだ？　？娘か、召使いか？　？言いにくいのなら今だけは敬語で構わん。だが、意思ははっきりしてもらおう」

??厳しい口調で、誠司は沙英を叱責する。

??「あなた、もう少し待ってあげて……」

??「一年だ。私は一年待った。しかし沙英は何も変わらなかった。むしろ酷くなつていく。元々沙英は慈亜に敬語を使っていなかった。それなのにも関わらず、今は当たり前のように敬語を使う」

??「敬語を使うのは、悪いことではないでしょう？」

??慈亜はなんでもないので言うが、誠司にはそれがダメだと思つているようだ。

??「ああそうだ。敬語を使うこと自体は構わん。が、沙英の敬語は私達と距離を置いたためのものでしかない。私はそれがダメだといふのだ」

??沙英は何も言わない。

??「出て行け、とは言わん。だが、努力はしてくれ」

??誠司は厳しい口調でそう言った。その様子はまるで、父親が娘を叱るような口調だった。

??「……いいの？」

??「なにがだ？」

??「私、要らなくならない？」

??それは、この一年沙英を縛りつづけてきた呪縛だった。二人が

友の死を受け入れたら、自分は不要になる。そんな恐怖を、沙英は常に感じていたのだ。

?? 「娘に要るも要らないもない。……そこにいてくれるだけで、いいんだ」

?? 「あなたはいてくれるだけでいいのよ。要るとか要らないとか、そんな問題じゃないの」

?? その呪縛を取り払ったのは、友の両親だった。友に対する罪悪感はまだにある。けれど、少なくとも捨てられるという恐れはなくなった。

?? 「……ありがとう」

?? 沙英は静かに微笑んだ。

?? 「構わん。さあ、食事にしようか慈亜。沙英が作ってくれた朝食だ、きつとうまいのだろうな」

?? 「ええ、そうね」

?? 二人は微笑みながらテーブルについた。

?? 「ねえ、お父さん、お母さん」

?? 二人と同じように座り、沙英が口を開いた。

?? 「……今まで、本当にありがとう。……これからも、よろしくお願ひします」

?? ペこりと、沙英は頭を下げた。今までのように距離を置いた敬語ではなく、親しみのある敬語だった。

?? 「ああ。こちらこそ、よろしくたのむ」

?? 「ええ、こちらこそ、よろしくね」

?? 嘉蓋 ? 栄が起こした連続殺人事件が終結してからおよそ一年、娘を失った悲しみと、親友を失った悲しみ。二つの悲しみは時間と共に、少しずつ、少しずつ癒えていった。嘉蓋 ? 栄の死刑が確定した頃には、友の死は、完全に受け入れていた。

?? 嘉蓋 ? 紗武は現在も裁判中である。自主した形になるので減刑はされるだろうが、死体遺棄が重い罪であることには変わりないだろう。彼がもう少しだけ警察に言うのが早ければ、友が死ぬこと

もなかったのに。そんな思いを抱いた沙英が、彼のことを恩人と思えるかといえば、そうではなかった。

??「……ごちそうさま。……いつてきます、お父さん、お母さん」
??沙英の傷もかなり癒えてきた。未だに外に出るのには勇気がいるし、扉を開けるのにも覚悟がある。けれど、事件の最中に感じていたような恐怖はもはやすっかり消えていた。友に対する罪悪感があることを除けば、今の沙英は普通の少女だと言えるだろう。

??「いつてらっしゃい」

??二人が見送りに来る。慈亜は必ず玄関先まで出て見送るが、それは無理のないことだろう。

??「じゃ」

??短く手を振ると、沙英は大学への道を歩き始める。その足取りにはもう迷いはなく、恐れもない。

??

??彼女は彼女の道をゆく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5635m/>

あの人を探して

2010年10月9日06時14分発行